合織糸・合織混紡糸

田村紡績株式会社

社長 田 村 正 衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593－65－2156（代表）
郵便番号 512

理事長登壇⑨

大阪・豊中市連盟理事長
遠藤信三

豊中市にハンドボール連盟が結成されて、十周年を迎えた。

ハンドボールの愛好者はご存知の如く、豊中は早くからハンドボールと深い関係のあるところで、中学・高校から大学・社会で技を磨き、既に国際試合の経験者も現われ、多数のハンドボールマンと立派な指導者をもっている。この豊中市が、連盟を結成したことは何の不思議さも感じないと思う。然し、十年前ややもすればまだ少数精鋭主義的なハンドボール界の中で、組織をつくっても、財政上動けないし、余程の根気をもってあたらないと続きはしないのではという不安と、焦燥をもってとにかくふみきった。発起人三人と市内各中・高校の先生方およびOB・OG代表が何度も準備会を開き日本のハンドボール界の歴史を築いた豊中で、過去の経験者が、若いハンドボールマンの健全育成のためにと、全員「奉仕」をモットーに連盟を結成した。豊中市体育連盟への加盟は勿論異議なく認められ、市民のスポーツとして、他の種目と肩をならべて、直ちに活動を開始した。市民ハンドボール大会・対堺市定期戦の開催をはじめ、日本スポーツ少年団にハンドボールとして加盟した。市民大会には、一般の部は勿論中学生まで自由にチームをつくり参加出来るようにした。中学時代や高校時代にハンドボールをしたものが、その後いろいろな事情で出来なくなった人達に何時までも続けられるようにした。従って、中学校のOB・OGのチームもどんどん参加している。中学生も学校代表の形ではなく、複数チームの参加があるため、クラブ員は勿論全員チームの一員として参加し、学校ではクラブに入っていなくても、チームをつくって参加できるようにしたので、昨年から大会には四日間を要する。本年も十月末よりにぎにぎしく開催されることと思う。四十六年の十月市民体育館が竣工した。当初は、ハンドボールコートはとても無理だということであったが、ハンドボール連盟の強力な要望により、臨時市議会で正規の広さのコートがとれるよう設計変更と追加予算が承認された。これも、市民のハンドボールに対する理解と深い関心のあらわれであろう。以来この体育館を中心として、活動がさらに活発になり、発展してきた。昨年の春からは、市の社会体育行事の一環として、スポーツ教室が本格的に開設された。ハンドボール教室も毎月一回午後四時から午後九時までおこない指導や練習会に多数の参加者を迎えた。参加者の中には、四十才をこえる男の方が一人で参加されボールの扱い方から手ほどきをうけておられたのを、ほほえましくみつめたこともある。本年からは毎月二回にふえ、四月から十二月までおこなう。昨年は十回開催し参加者は、六一〇名で、本年はさらに多くなることと思う。小学生は六時までとし、常に数名の指導者が懇切丁寧に指導にあたっている。この指導者は、ハンドボール連盟の役員、委員が委嘱されてこれにあたっている。小学生は楽しく参加し、出席率も九九・五パーセントである。毎月二回のこの機会をたのしみにし、技術も相当すぐれたものがみられる。また、昨年に引続いておこなわれている家庭人トレーニング教室で、カリキュラムにもハンドボールを入れ、その大部分の方は、大きな興味をもち、これが次の段階に発展し、ママさんハンドボールがおこなわれることになった。先日の会長杯争奪大会の際にも、オープン戦としてママさんのゲームをおこないとてもなごやかで、もっともっとやりたいので機会をつくってほしいとの希望が出ている。豊中市ハンドボール連盟は、一人でも多くの市民に、実際にハンドボールをやり、たのしみ、そのよさを見つけて巾広く、奥行きのあるハンドボール入口の増加を目指している。独力で十年歩みつづけ、今後もそうなるかも知れないが、たとえ、その活動がささやかなものであっても、きっと美しい花を咲かせ、立派に実を結ぶであろうことをたのしみにして今日も活動を続けている。

日本協会も数年来目ざましい発展をとげ、本当に喜こばしい。然し最近こそ底辺の拡大について云々されて来たが、地方協会とよく連けいを保ち、底辺の拡大が単なるスローガンに終わることのないように願いたいものである。そしてそのための施策を講じ、富士山の如く裾の広い雄大な姿をおもわせる、大樹の如くしっかり根を張った日本協会の躍進を心から祈っている。

「ハンドボール」

10月号（第113号）目次

【表紙写真】ユーゴの巨砲ラザレビッチの迫力に満ちた攻撃。全日本は三人がかりのマークである。（9月1日・東京体育館　撮影・山口芳則）

嵐の速攻、鉄壁の守備網

ユーゴ、「金メダル」の実力示す

日本・ユーゴ国際親善

金メダルの威力、貫録。ユーゴスラビア・オリンピックチームは「世界最高」といわれるにふさわしい力と技を存分に発揮、嵐のように日本を襲い、去っていった—内外の注目を集めた日本・ユーゴスラビア国際親善シリーズは、9月1日東京体育館での全日本戦を皮切りに、全国5都市で6試合が行われた。

ミュンヘン・オリンピックで、近代ハンドボール史上最強の絶讃をうけつつ栄光に輝やいたユーゴは、つねに斗志に満ちたプレーで、満を持して挑んだ日本勢を制し6連勝、その強さをまざまざと見せつけた。

過去1勝1分1敗と互角の全日本は東京、京都で二戦をまじえたが、ユーゴの自信にあふれた攻守に圧倒され連敗、その他の有力実業団も健斗しながら〝金メダルの壁〟を突き破ることができなかった。しかし、オリンピック優勝国を迎えて、記録的な観衆をのんだ第1戦（東京体育館）をはじめ各会場は熱気にあふれた雰囲気に包まれ、シリーズは大成功のうちに幕を閉じた。

8月29日夜の来日から9月10日の帰国まで13日間、それは、36年の日本ハンドボール史のなかでもかってない感激と興奮と収獲の日々であった。

全日本、前半で力つく

第1戦・全日本との第1回戦は公式国際試合として9月1日午後3時45分から東京体育館で行われた。審判員＝安藤純光、佐野和夫。記録員＝岡前義春。計時員＝大塚文雄。観衆＝約五千

観戦記

渡辺邦雄（朝日新聞東京本社運動部）

ユーゴスラビア 23（13−5／10−6）12 全日本

○……満員の五千ファンは、五輪金メダル・チームの深みのあるプレーに酔ったに違いない。ユーゴは選手個々のしっかりした基礎技術を土台に臨機応変の攻守を展開し、全日本を軽くあしらってしまった。強さと巧さと速さ、それにプレーの美しさをも兼ね備えたチームという印象が強い。

まあ、勝負になった、といえるのは前半22分、飯田が中央からジャンプ・シュートを決めて全日本が5−7としたときまで。全日本は3分10秒、大江が右サイドから線防御のユーゴ陣へ強引に切り込んで1−0と先制した。だが、4分ポクラヤクに中央から同点のシュートを許し、5分5秒にはユーゴが誇るL・L砲の一人、左腕ラブルニッチに右45度から逆転のロング・シュートを決められてからは、遂に一度もリードを奪うことができずに終った。

得	【ユーゴスラビア】		【全日本】	得
0	アルスラナジッチ	GK	本田（大阪イーグルス）	0
0	ゾルコ	GK	下里（大崎電気）	0
4	ホルバット	FP	木野（湧永薬品）	3
0	ファイフリッチ	FP	氷海（千葉教員ク）	0
5	ポクラヤク	FP	藤中（大同製鋼）	1
1	ラザレビッチ	FP	飯田（大崎電気）	3
3	ラブルニッチ	FP	大江（三菱レ大竹）	1
2	ミルヤク	FP	新実（本田技研鈴鹿）	0
2	ブガルスキー	FP	佐藤（本田技研鈴鹿）	2
2	ブリパニッチ	FP	菊池（早大）	0
0	ミスコビッチ	FP	夏目（中京大）	0
4	セルダルジッチ	FP	蒲生（中大）	2
23	（3）	7MT	（0）	12

後半7分10秒，新鋭・蒲生（中大）豪快なシュート決める
（撮影・山口芳則）

ユーゴは「飛行機内で9度の食事をとり、三十一時間の旅」（スノイ監督）をつづけて前々夜、来日したばかり。当然、時差ボケもあった。それなのに、ミリコビッチ・コーチは試合後「本来のスピードがなかったので開始間もなく頭脳的プレーに切り替えたが、70%の出来」といった。100%といえないのは、ラブルニッチとラザレビッチのL・L砲が計4点しかかせがず、チームとしての練習不足から連係プレーが完全とはいえなかったためだろう。

とはいえ、日本選手よりも上背や体力で大きく優る彼らが、日本得意の速攻をしのぐスピードを見せ、両サイドをフルに使ったゆさぶりや、鮮やかなポストプレーをふんだんに披露した。前半3−2と迫られた13分、大きく速い球回しのあと右サイドのブリパニッチから山なりのパスが左サイドへ送られるや、ポクラヤクがダイビングよろしく両手でトスするようにゴールへ押し込んだ。スカイプレーの美しさが浮き彫りされたシーンだったが、一瞬の好機を逃がさない鍛えられた「目」があった。それは日本のちょっとしたミスから一気に速攻で得点する抜け目のなさにも表われていた。

新旧交代の時期にある全日本は連係プレーがちぐはぐ、管制塔役の木野も苦労したのは同情できる。しかし、速攻で決めたのは12得点のうちわずかに2点。木

野、飯田らの強引なジャンプシュートや佐藤のアンダーシュートが時折り決まりはしたが、中途半端な速攻では勝負にならないことを示していた。大男をボデーチェックしつづける結果のスタミナの消耗度と比例して鈍っていった。速攻の威力。日本の課題を改めてさらけ出した試合だった。

技術評

荒川清美

フリースローラインの手前から易々とシュートをほおりこむロングシューター陣をマークすれば、ポストマンたちにゴールエリアライン周辺をえぐられ、得点機をつかまれるというユーゴの攻撃に対して、日本のディフェンスがどこまで、その動きを封じこめるかをカギとみたが、ユーゴはミュンヘン時よりもいっそう自信と余裕をもったプレーで、我々の〝期待〟を打ちくだいた。

先制点を日本があげ、前半なかばまで互角——この展開はまったくミュンヘンと同じである。

22分で5—7。このあと日本ディフェンスがどう守るか。結果的には、ここがこの試合の最大のヤマ場であった。

ところが、日本はこのあとの4分間であっというまに3点をもぎとられてしまったのだ。

口火となった1点は、ルーズボールをラザレビッチに素早く拾われてしまい、ボクラヤクに決められたもの。ラザレビッチのシュートを食いとめるのにディフェンスは精いっぱいで、はね返ってくるボールへの反応はまったく無かった。さらに7MT（ラブルニッチ）、プリバニッチとたたみかけられダブルスコア。

ここさえ、なんとかもちこたえれば、日本は、リードされながらも勝利への射程圏内に相手を留めておくことができたと思う。

身体で身体を止める防禦、たえまない密着——これはなみたいていの努力では成らない。しかし、その心技なくしては、世界のトップへは仲間入りできないのだ。

その点、ユーゴは実にみごとである。60分間、まったくスピードが落ちない。たえず全員が動きつづけている。これは攻防どちらの場合でも、すぐに次のプレーに移れることを示す。なんのことはない「球技の基本」として、以前から口がすっぱくなるほど云われている〝動作〟なのである。

しかも、ユーゴの動きにはムダがない。例えば日本が速攻を仕掛けると、彼らは両手を大きく拡げながら、後向きで全速力に帰陣する。相手のパスを少しでも遅らせようとしているのだ。10点目は、この動きを忠実に守っていたホルバットに、日本のパスがひっかかり、逆襲されて失ったものである。日本は、攻撃面でもいささか単調で、やたら中央突破を狙って、相手守備網のカットにあった。

サイドからのゆさぶり、警戒心を誘うための〝犠牲打としてのスカイプレー〟などを活用すべきだったし、疲れからタイミングがとれなかったのも一考を要そう。

惜しまれるのは、後半5—11から7MTを下里が止めた直後、蒲生のゲットで6—11とし、さらに速攻から蒲生—飯田と絶好のパスが渡りながら、得点に結びつかなかったプレーだ。ムードもテンポも上り調子だっただけに、この逸機は痛い。こうした局面でゲットする確実味が望まれる。

ユーゴはさすがに、全員が洗れんされた攻守をみせたが、特にGKアルスラナジッチの沈着なプレー、ボクラヤクのリードマンシップはみごとだった。LL砲は本調子ではなく、むしろミルヤクがいちだんと成長をとげ印象深かった。

（日本協会理事長）

日本・ユーゴ①ランニングスコア

	【日本】	【ユーゴ】
前半		
3分10秒	①大江	
3分30秒		①ボクラヤク
5分5秒		②ラブルニッチ
9分40秒		③ボクラヤク
12分10秒	②飯田	
12分35秒		④ボクラヤク
13分30秒	③藤中	
14分10秒		⑤ホルバット
15分30秒		⑥ラザレビッチ
17分10秒	④佐藤	
18分8秒		⑦ホルバット
22分10秒	⑤飯田	
24分20秒		⑧ボクラヤク
26分2秒		⑨ラブルニッチ(7)
28分10秒		⑩プリバニッチ
後半		
3分15秒		⑪ホルバット
7分10秒	⑥蒲生	
8分10秒	⑦木野	
9分		⑫セルダルジッチ
10分30秒		⑬ホルバット
11分9秒	⑧佐藤	
12分10秒		⑭セルダルジッチ
13分35秒		⑮ボクラヤク
15分8秒		⑯ミルヤク(7)
15分44秒	⑨木野	
16分52秒		⑰セルダルジッチ
19分40秒		⑱セルダルジッチ
20分12秒	⑩木野	
21分12秒		⑲プリバニッチ
23分6秒		⑳ミルヤク
24分2秒		㉑ラブルニッチ(7)
24分55秒	⑪蒲生	
25分30秒	⑫飯田	
25分7秒		㉒ブガルスキー
28分22秒		㉓ブガルスキー

・(7)は7MT

ユーゴ快攻、三景近よれず

第2戦・三景（東京、全日本実業団5位）との試合は2日午後2時31分から東京体育館で行われた審判員＝岡前義春、大塚文雄。観衆＝約二千五百。

ユーゴスラビア 35（19―3、16―10）13 三景

【三景】		得
GK	西牧	0
GK	佐藤	0
FP	佐々木	3
FP	加藤政	2
FP	内藤	0
FP	植田	0
FP	喜田	0
FP	※近森	3
FP	高梨	3
FP	上平	1
FP	高森	1
	7MT（1）	13

【ユーゴスラビア】		得
GK	ゾルコ	0
GK	ニムス	0
FP	ファイフリッチ	2
FP	ホルバット	6
FP	ポクラヤク	3
FP	ブガルスキー	6
FP	ミルヤク	4
FP	ラデノビッチ	3
FP	ラブルニッチ	3
FP	ブリバニッチ	1
FP	ミスコビッチ	1
FP	ラザレビッチ	3
FP	セルダルジッチ	3
	（3）	35

※近森（三陽商会、元大崎電気）は特別補強選手

観戦記

大国拓哉（読売新聞運動部）

ミュンヘン五輪の金メダルと全日本実業団選手権大会五位の対戦――。勝敗は別として、三景が"王者らの持てる力をどのように引き出すか――に焦点があった。

しかし、結果は三景に"当って砕けろ"の闘志が見られなかったことから、王者の実力を引き出すどころか「つまらぬ試合」（スタンドのファン・中島裕康さん）に終ってしまった。

ユーゴは堅守のGKアルスラナジッチがベンチを暖め、攻撃の主力"LLコンビ"のラブルニッチ、ラザレビッチの両選手も得点を奪われた直後だけ、顔見せ程度にコートへ出すといった手控えよう。それでも余裕たっぷり。両サイドを十分に生かしたパスワークで三景デフェンスをゆさぶってはポストプレーでゴールを攻めたてた。そして2分、ブガルスキーが正面から切り込み先取点をあげると、新鋭の左腕、ミルヤクのジャンプ豊かなロングシュートなどで9分には早くも6点を連取、試合を一方的にした。これに対し、三景は"金メダル・チーム"を意識しすぎたせいか、立ちあがりからコチコチ、基本技であるパスキャッチにまでミスを連発して意気消沈。前半わずかに近森（特別補強）、佐々木の両ミュンヘン五輪代表の個人技などで3点をあげただけだった。

後半に入ってもユーゴは攻撃の手をゆるめず2分、ラザレビッチの7MTをきっかけに、まるで赤子の手をひねるように7分までに5連続ゴールして差を広げた。

これには、スタンドのファンもジッとしてはいられなかった。「なんとかしろ」と、三景の不がいなさをなじる声が、あちこちからあがった。このスタンドの怒りがユーゴにもわかったらしく、その後は帰陣をゆるめ、GKもゾルコから経験浅いニムスに代えるなどして三景に得点チャンス?を与えてくれた。

「日本の技術はすぐれている。でも国際試合の経験があまりにも少なすぎる（ユーゴは毎年最低で四十試合はしている。日本は良いときで十試合）。それがミュンヘン五輪での差となったのだと思う。もっと国際試合を多くやらなくては」と来日早々いっていたスノイ監督も、あまりの手ごたえのなさに「これも経験のうちかな」と首をすくめた。

明年の世界選手権、そしてモントリオール五輪を目指す選手強化の一環として招いたユーゴだが、三景のような元気のなさでは強化はおろか、せっかくのファンにも「ハンドボールとはつまらぬもの」とそっぽをむかれる要因にもなり、普及面でもマイナス。弱者ながらも最後まで力一杯のプレーをしなくては相手に失礼だ。こんな調子では「二度と日本には…」という国が出ることにもなりかねないだろう。どうせやるなら相手の力を引き出してこそ招待の"効果"がある。単独チームよりは目標をもつ全日本チームを一日も早く作り、一つでも多くぶっつけてこそ"実"のある親善試合となったのではなかろうか。

相手のブロックを突き破るラブルニッチの高打点からのシュート（三景戦　撮影・山口芳則）

技術評

T・ミハイロビッチ（ベズニッキ紙特派員）

三景は一つのミステークをおかした。それは、彼らがユーゴに対して、日本国内のチームと対戦する時と同じような戦術で臨んだことである。

三景の特色は、技巧的なプレーにあるそうだが、ユーゴのような長身者を揃えたデイフェンスに向かって、やたらにポストヘショートパスを通そうとしたり、空間パスで突破口を狙っていたのは、まったくムダというものである。

三景は"挑戦"者として、もっと果敢に走り、突き進むべきだったのではなかろうか。

デイフェンス面に於いてもまったく無防備であった。そのためユーゴは80%をこすシュート成功率をマークすることができた。

もちろん、三景にまったくよいプレーがなかったわけではない。

西ドイツで活躍していた近森は練習不足といいながら、考えたプレーをみせていたし、高梨の鋭い動きも目立った。しかし、残念なことに、それらはあまりにも散発的で、60分間連続することがない。

三景が、きようのようなテンポとペースで、日本国内の試合に勝ち進んでいるのだとしたら、それはあまりよい傾向とは云えまい。

三景の善戦を期待して、この大ホールに集って観衆たちは、不満な気持ちで帰途についたのではないか。（談、文責・編集部。ミハイロビッチ氏は一行の渉外役を兼ね来日したもの。ベズニッキ・ザグレブ紙でハンドボール、サッカーを担当しているスポーツライター）

大崎、前半互格の健闘

第3戦・大崎電気（全日本実業団第3位）との試合は、4日午後6時31分から盛岡市青山の岩手県営体育館で行われた。審判＝由利弘、佐々木茂喜。観衆＝約千八百

ユーゴスラビア 21（12－3、9－8）11 大崎電気

後記

ユーゴは後半、本来の力を発揮して大崎電気を圧倒、速攻やサイドからのタイミングをはずしたシュートなどを決め"金"の貫録を示した。前半、先取点を挙げたのは大崎電気。40秒に沢田が左45度から中央へ流れるように切り込んでシュート、鮮やかな先取点だった。しかし、ユーゴも1分すぎ、ミスコピッチが左サイドから得点、前半は1点を争う試合展開となった。

しかし、ユーゴは後半見違えるように動きがよくなり、立て続けに4点連取するなどして大崎電気を大きくリード。ディフェンスの面でも、大崎電気のフォーメーションを封じ、わずか3点に抑えて大勝した。

ユーゴの平均身長は187センチと大崎電気より約10センチ上回っているが、プレーそのものは素早く、速攻、切り込みシュート、サイドシュートと多彩な攻撃を展開、力と技術を備えたゴールドメダリストチームにふさわしい試合をみせてくれた。一方、大崎電気も後半、大差をつけられたもののよく健闘した。特に沢田、菊池らの若手が力をつけてきており、今後が期待される。

（この記事は、9月5日付岩手日報紙に掲載されたものを、同社の御厚意で転載しました。）

第3戦、前半にみせた大崎電気の健闘は鮮やかだった。速攻から豪快なシュートを放つ飯田（岩手日報・撮影）

ユーゴナショナル来日選手名簿

団長 ブランコ・ガシヴォーダ（48） ユーゴクローティンアンハンドボール協会副会長，銀行支配人

監督 イワン・スノイ（50） ナショナルチーム監督，教員

コーチ ヨシップ・ミリコビッチ（31） ナショナルチームコーチ，スポーツトレーナー

選手		年令	身長（cm）	体重（kg）	職業	公式国際試合出場	日本での得点
GK	①アバス・アルスラナジッチ	(29)	189.	93	教員	67試合	・
	⑯ズデンコ・ゾルコ	(23)	186.	77	学生	23	・
	⑮ジェリコ・ニムス	(23)	187.	83	学生	4	・
FP	②ミロスラフ・ブリバニッチ	(27)	186.	77	公務員	115	11
	③ペター・ファイフリッチ	(31)	180.	80	電気技師	62	7
	⑤ジョルジュ・ラブルニッチ	(27)	192.	91	塗装業	114	18
	⑥スロボダン・ミスコビッチ	(29)	185.	88	技師	77	8
	⑦ハルボエ・ホルバット	(27)	190.	85	法務官	125	18
	⑧ブラニスラフ・ポクラヤク	(26)	183.	78	教官	117	19
	⑨セドミル・ブガルスキー	(30)	178.	82	会社員	33	17
	⑩ズドラフコ・ミルヤク	(22)	189.	85	学生	50	21
	⑪ミラン・ラザレビッチ	(25)	188.	85	学生	71	15
	⑫ズドラフコ・ラデノビッチ	(21)	194.	80	学生	5	7
	⑬ズボンコ・セルダルジッチ	(23)	186.	96	学生	6	15

随行記者 トーマ・ミハイロビッチ（40） 「ベズニッキ・ザグレブ」紙特派員

・○内数字は日本での背番号

・公式国際試合出場数は今回の遠征（2試合）を含む

・日本での得点は6試合の合計

得	【ユーゴスラビア】		【大崎】	得
0	ニムス	GK	下里	0
0	アルスラナジッチ	GK	岩下	0
2	ラデノビッチ	FP	飯田	3
1	ファイフリッチ	FP	東	0
1	ブリバニッチ	FP	佐藤章	0
4	ミルヤク	FP	荒井	3
3	ラザレビッチ	FP	沢田	4
3	ラブルニッチ	FP	坂口	0
0	ホルバット	FP	※菊池	1
3	ポクラク	FP	谷口	0
3	ブガルスキー	FP	前渕	0
1	ブリバニッチ	FP	佐藤文	0
21	(4)	7MT	(0)	11

▽交代 FP セルダルジッチ得0

※菊池選手（早大）は特別補強選手

技術評

北村 尚英

ユーゴは、速攻と堅い防御を基本にしたオールラウンドの理想的なチームといえよう。

一人一人がバネのような体と、スタミナを基礎とした走力、シュート力とゲームの流れに対する「読み」を持っており、その「読み」と個人技のかみ合せで、それほどの早さやすごさを感じさせずに攻め、そして守っている。従ってきわどいプレーや派手なプレーは少なく、確実性がある。

速攻にしても一人だけが走るということは少なく、一人が走ったあとを二人、三人と波状的に走るという日本的な速攻を見せた。

防御においてはキーパーとのコンビでシュートを打たせて守るという型をとっている。これもアルスラナジッチという優秀なゴールキーパーがいるから出来ることであろう。六人が常に等間隔で動き、ボールに対する「つめ」、横へのフォローの速さで非常に厚味を感じさせる。ポストへの侵入に対しては、強い当りで内には絶対入れないように気を使っている。

日本チームは、攻撃においてあらかじめ決められたフォーメイションでなければ攻められないようであるが、これではいつまでも、ヨーロッパチームにはかなうまい。

（岩手協会技術委員、42年度全日本男子監督）

速い動きで大同善戦
ユーゴ、藤中にマンツウマン

第4戦・大同製鋼（NHK杯、全日本実業団優勝）との試合は6日午後6時30分から名古屋・愛知県体育館で行われた。審判員＝福石三二、奥村方志、観衆＝約四千

ユーゴスラビア 26（13—10 / 13—6）16 大同製鋼

得	【ユーゴスラビア】		【大同】	得
0	ニムス	GK	柳川兄	0
0	アルスラナジッチ	GK		
3	ホルバット	FP	野田	2
4	ポクラヤク	FP	藤中	7
2	プリバニッチ	FP	加藤	0
3	ラブルニッチ	FP	松原	4
4	ラザレビッチ	FP	花輪	3
3	プガルスキー	FP	柳川弟	0
0	ミスコビッチ	FP	中井	0
1	ラデノビッチ	FP	石川	0
2	ミルヤク	FP		
4	セルダルジッチ	FP		
26	（3）	7MT	（3）	16

交代　GKゾルコ

観戦記

改田智洋（朝日新聞名古屋本社運動部）

「何んとかひとあわふかせてやりたい。チームが好調とはいえないが、選手はやる気十分です」ユーゴ戦が行なわれる前日の五日夜、大同製鋼の中浜監督はこういった。この言葉通り闘志のある試合展開を見せた。だが、名実ともに「日本一」の大同製鋼もやはり「金メダルチーム」には通じなかった。

エース中井が左手首をねんざしているうえ、盲腸を手術した直後。そればかりかベテラン野田は下痢気味で試合前一週間ほど食事も満足にしていなかった。このため藤中、花輪、松原にたよらざるを得なくなった。この状態では好調な時と比べると得点力はぐっと落ちる。だが大同は立上がりから果敢な動きを見せた。守っては徹底したマンツーマンディフェンスをしき、攻めても速いパスワークからシュートにつなぐ。藤中がたて続けに3本シュート。だが、いずれも上からのシュートで長身選手三人で真ん中を堅めたユーゴのディフェンスにはばまれて得点に結びつけることは出来ない。しかし2分、藤中、花輪と回して先取点をあげる。15分過ぎごろまでは互角以上の試合運びだ。

ここでユーゴはいままでとがらっと変えたディフェンスをしいた。パスワークの中心でもあり、シュートも放つ藤中をポクラヤクかプガルスキーがプレス・ディフェンス（アサインド・マンツウマン）に出たのだ。藤中がハーフラインまでさがってもついて来るという徹底したもの。いままでユーゴは横一線のディフェンスしかやらなかったことからみてもいかに大同の速い動きにとまどったかがわかる。得点は6—3とユーゴリードの時点だったが、うち2点が7MT。このろえ藤中にかきまわされて差をつめられたら試合のペースを奪われてしまうと思ったのだろう。試合終了後の記者会見でもスノイ監督は「藤中の手首を効かしたシュートとパスワークに、うちのGKやFPがとまどっていた」といったほどだ。

ペースをくずさなかったユーゴは今度はたたみかけるような攻撃に出た。ロングシュートを打つとみてはポクラヤクのポストプレー、右サイドからのシュートを多用して一気に差をつけた。後半にはいると前半活躍したポクラヤクに球を集めず、ラザレビッチが強力なシュートを放つし、ちょっとマークされるとセルダルジッチ、プガルスキーらが打つ。ベテランGKアルスラナジッチが再三のピンチを好守備で防いでいるのにむくいるFPの鋭い動きだ。後半11分で20—8と大きくリードし試合の大勢を決めた。

リードされた大同も後半分ごろから猛反撃に出た。藤中が7MT1本を含む連続4得点をあげて懸命に追いすがろうとしたが時すで

アルスラナジッチ選手訪問

ヨーロッパのファンは彼のことを豹と呼ぶ。ゴール前に立ちはだかり、えもの（シュート）を狙う精かんなプレー、正に異名どおりである。だが、この豹、ひとたびユニホームを脱ぐと、実に柔和な、人あたりのいい男だ。

「体育の教師をしています。若い生徒たちは、私がハンドボール以外のことを教えようとすると不満な表情を浮かべるので、いつもハンドボールの授業ばかりになってしまいます」

14才から18才まではあらゆるスポーツを手がけた。中でもバスケットボールやバレーボールはなかなかの腕前、その経験がハンドボールのGKになったあとずい分役立っているという。

「あたりまえのことですが、GKはジャンプ力、敏捷さ、それに強じんな身体が第一です。バスケット、バレー時代の身体づくりが活きてます。

現在も、トレーニングの大半は、ボディビルディングです。他の技術をみがくのは試合することが一番、試合こそ最良の師なのです」

ベンチに居る時は、敵味方を問わずGKの動きばかりを追うという。

「本田はミュンヘンの時よりいっそう老錬になりましたネ。防禦技術、勇気、冷静さ、状勢判断——どれをとっても世界一流です。下里も今がアブラののり切った時期でしょう。

ただ、もう少し日本のGKはステップを大きくしたら、もっと機敏な動きができると思いますが——」

温和しい口調、故郷には6才になる一人息子が、やさしいパパの帰りを待っている。おみやげはキモノ、人形、沢山のシャツ……。

「蒸し暑さを除いては、今回の遠征はすばらしいの一語でした。

それにしても、人間と車が多いのには驚きました。それでいながら滞在中交通事故を見かけたのは一回だけでした。

比べものにならないほどすいているユーゴでももっと事故はあります」

右に左に放たれる強シュートを、巧みに捌ききるさすがの名GKも、車の流れをあやつる交通警察や、その間をぬう日本人の〝俊敏さ〟は、かつてない「驚異の経験」であったことだろう。

に遅しだった。ヨーロッパ勢との対戦では横か下からのシュートが効果的とよくいわれる。事実、藤中が連続得点したのは横か、下を狙ったものだった。ユーゴがとまどっている前半10分間の勝負どころでこのシュートが出なかったのはくやまれる。これでリードを保って押しまくっていれば試合展開はもっと変わっていただろう。それと野田は得意の倒れ込みシュートを一本決めたが、中井とともに本調子でなかったのも大きく響いた。

技術評

古沢辰郎

試合開始1分、大同は速攻による先取点をあげ、幸先よい滑り出しをみせたが、その後はユーゴの固いディフェンスによって、国内試合でみせる幅広い攻撃の糸口をなかなかつかめなかった。

ユーゴの防禦は、主に一線の型をとり、パスに対する鋭いヨミから生ずる詰めの速さと、そのあとのポストカバー（ピストン）の正確さでロングシュートを封じ、ポストプレーをも防いだ。

また、この日当たっている藤中に対して密着マンツウマンを行なったり、攻撃側45度のプレイヤー（中井）とサイドマン（野田）とのパスコースに一人出る変則的な1・5ディフェンスをとって、サイド攻撃の芽をつみ、攻撃のリズムを狂わすなど、臨機応変な守りをみせた。

このディフェンスに対し、大同はダブルポストで攻撃を仕掛けた。

前半、ロングシュートは早目につぶされ、ポストの動きは、身体の大きなディフェンスにおさえられ、得意の速攻もGKの堅守に阻まれ、波に乗れなかった。

後半、藤中の再度にわたる頭脳的なジャンプシュートによる得点からきっかけをつかんだかにみえたが、サイドからポストへのパスが長身でリーチの長い相手にカットされるなど、今一つ本来のテンポにのれなかったのは惜しまれる。

守りの面で大同は、半マンツウマン的な体型と1・5をとり、早目々に当たることによって、ある程度、ロングシュートを防ぐことができたが、ゴールエリア附近の守りが手うすになった。

ユーゴは、この大同の動きをよくみて、センター・スリーのローリングからポストの動きに合わせてパスを通し、全得点の三分の一をポストプレーで決めた。そしてディフェンスの詰めが少し遅れると、フリースローラインの外側から豪快なロングシュートを放ち、ディフェンスが孤立して1対1になれば、フエイントを使って抜きサイドからはボクラヤクが決めるなど、実に多彩な攻撃を展開した。

両チームともよく走り、スピーディな試合運びとなったが、選手交替をひんぱんに行ない、疲労を未然に防いだユーゴは、前・後半を通してすばらしい速攻を披露した。

「金」メダルチームに対し、大同は、病後まだ完全に復調していない中井を加え、気力と高度なテクニックで善戦したが、体格・体力の差はいかんともしがたかった。

（愛知協会技術委員）

大同戦。ミルヤク，秀れたジャンプ力を活かして鋭いシュート放つ（中日新聞提供）

大同、連勝記録止まる　昨年12月10日の全日本総合選手権・対大崎電気戦以来、2引き分けをはさんで41連勝をつづけていた大同製鋼の不敗記録は終止符が打たれた。

★注目の新コーチ　スノイ監督の片腕としてユーゴに金メダルをもたらす陰の殊勲者となったステンツェル元コーチに代って、新しくその座に就いたミリコビッチ氏（31才）は、過去8年間ナショナルプレイヤーとして活躍、4年前、交通事故で選手生活を断念、それ以降、ステンツェル氏の次席コーチをつとめていた人。

スノイ監督に言わせると、ユーゴの生んだもっとも秀れた選手の一人ということであった。

★ミルヤク50試合記念　将来のエースと評判高いミルヤクが京都での対全日本戦で公式国際試合出場50回をマーク。ユーゴ協会の慣例で、記念メダルが試合前の開会式で、ガシウォーダ団長（ユーゴ協会理事）から贈られ、場内を埋めた観衆の盛んな拍手を浴びた。

ユーゴあっさり逆転

湧永薬品，先制も実らず

第5戦・湧永薬品（47年度全日本総合選手権優勝）との試合は8日午後6時から大阪市中央体育館で行なわれた。審判員＝東嘉仲、新村理文、観衆＝約四千

ユーゴスラビア 28（14—8 / 14—6）14 湧永薬品

得	【ユーゴスラビア】		【湧永】	得
0	ゾルコ	GK	今井	0
0	ニムス	GK	※福井	0
1	プリバニッチ	FP	市原	1
3	ラブルニッチ	FP	木野	2
3	ミスコビッチ	FP	※有永	1
4	ファイフリッチ	FP	高橋	5
2	ブガルスキー	FP	森	2
3	セルダルジッチ	FP	戸田	1
1	ラデノビッチ	FP	※津川	1
1	ホルバット	FP	田中	0
1	ポクラヤク	FP	※穂積	1
3	ラザレビッチ	FP		
6	ミルヤク	FP		
28	(3)	7MT	(2)	14

▽交代　GKアルスラナジッチ、※福井(中京大)、有永（大阪福島ク）、津川、穂積（ともに大阪経大）は特別補強選手

観戦記

小山敏昭（共同通信社大阪運動部）

ユーゴがオリンピック金メダルの貫録を見せ、一時は3点もリードを奪った湧永をあっさりねじ伏せた。ユーゴの早いパスワーク、速攻はまさに日本のお株を奪ったという感じのゲームだった。

先制点は湧永だった。1分過ぎ右サイドから高橋がGKの足元を抜いた。そして5分18秒、右サイドから逆速攻をかけ、森が加点した。2—0、湧永の選手一人一人が『もしかしたら』の感を持ったに違いない。しかしその期待も5—3と湧永がリードして迎えた12分過ぎには、まったく消えうせてしまった。ユーゴが、ラブルニッチ、ラザレビッチの両巨砲、若手のミルヤクとベストメンバーを編成し、反撃にかかったからだ。精力的な動き、力強いシュートは日本でもあまり高くない湧永のディフェンスをあっさり突破してしまった。18分13秒、シュートカットからの速攻でファイフリッチが決めて同点。18分55秒には新人のセルダルジッチが中央から強引にゲットして逆転してしまった。それからは追い込んだ気易さからか、パスを組みたてて湧永守備陣を揺さぶったり、ドリブルから速攻をかけたり、にくらしいほどのフェイントを見せたりで、またたく間に11—6と点差を開いてしまった。

有永（東京海上・大阪福島ク）、津川、穂積（以上大経大）とシュート力のある大柄な選手を補強し、森、高橋ら小粒な選手との変化をねらった湧永だったが、ゲームメーカーの木野さえもユーゴの迫力に圧倒され、切れのいいプレーがほとんど見られなかった。

14—8と6点差で終わった前半に比べ、後半はワンサイドだった、立ち上がりこそ有永が2得点し、場内を沸かせたが、10分を過ぎてからは場内からはため息ばかり。ラザレビッチの中央からのジャンプシュート、ミルヤクの右サイドからのリストを利かした強烈なシュートは湧永を手玉に取った。GKを20分ずつ交代させたり7MTを別々の選手に打たせたりする余裕を見せ、結局は28—14のダブルスコアーで快勝してしまった。

★「時計は持っています」

外国選手の日本みやげといえばカメラ、着物、時計がベスト3だが、ユーゴ選手は「時計は結構」という。それもそのハズ、彼らはミュンヘン優勝の御褒美としてチトー大統領から、一人々々に高価な金の腕時計がプレゼントされており、妻帯者には夫人にも贈られている。何国製なのかは聞きもらしたが、たしかにこれ以上栄光の時計は世界に二つとないだろう。

ホルバット主将訪問

17才でナショナルプレイヤーになった。層の厚い欧州、いかに秀れた天分を持っていたかが判る。裁判官が志望、着実にその道を歩いているというが目下のところ軍籍にある。帰国後、約20日で除隊という。

「そうしたら、法律とハンドボールをまた熱心にやりますヨ」

去年はすばらしい年だった。3月にヨーロッパカップ優勝、9月に金メダル。「若手が伸びて来たし、もうそろそろ退く時だとも思うのですが——」と言ったところで、横合いからスノイ監督が「まだまだ、やってもらわなくては困る」と口ばしを入れた。彼は笑うだけ。温厚な人だ。

すでに公式国際試合出場125回視野の広いプレーは定評がある

——あなたのみた、世界最高のプレイヤーは、

「シュミット（グンメルスバッハ、46年来日）が西独誌で〃どもかくユーゴの7人は別格〃といっているが、これは信用していい話だ(笑)。FPではロスト（東ドイツ）、マキシモフ（ソビエト）、GKはウチのアルスラナジッチ以外にいない。グルイア（ルーマニア・FP）は、今や守りのできない半端なプレイヤーだ。ラザレビッチ、ミルヤクみんな彼以上……」

——ユーゴは、来年の世界選手権、3年後のモントリオールをどう闘うか。

「優勝するために努力を惜しまない。今回の日本遠征はそのための訓練の一過程だった。」

話し終って帰ろうとしたら呼びとめられ、

「日本での毎日はすべて順調だった。客をもてなす友情、親切にあふれた日本の人たちに選手はみんな感謝している。」

主将らしい気のくばり、みごとなしめくくりであった。

技術評

村田　弘

最も印象に残ったのは、ゲームに対する意欲と執念である。

どのような点差になっても、全員が自分の立ち場を忠実に守っている。

体力もすごい。60分間走り、動き廻って、しかもリズミカルなボデーバランスを失なわない。今さらながら〝世界一の壮絶さ〟を知った思いだ。

ユーゴというチームはどちらかというと技術派でその上に世界の他の強豪の持つ力強さも備えているから鬼に金棒である。

特に、防御はいくつかのディフェンスフォーメイションを持ち対戦チームの攻撃により最も適合したものを採用している。休みを入れることなく足を使って動き回り腕でリズムをつくり相手に対する早いつめ、相手の動きを読んだ組織力、機を見てのボールカット、声の連絡、又帰陣の早さは観戦していたハンドボールマンに良き教科書を与えてくれた。

相手の攻撃に対し、相手パスプレーヤーのコースを完全につぶしカットをねらって逆速攻に転じた。特別のプレーヤー以外はどのディフェンスポジションでもこなしている。

攻撃は味方ボールになるやすばらしい判断力により速攻に転じ、進むにつれてスピードが増し相手の帰陣をほんろうさせ強烈なシュートに結びつける。又キーパーのボール出しも日本のキーパーに較べ球足は早くないが正確に走っているプレーヤーの前に落とすといった感じで、前に出ないと見るや一気に近くにパスをする。

セットにおいては〝ズラシ〟のプレーが多くフォーメイションに生かされていた。日本のポストプレーはポストに位置しているというプレーが多いが彼等はポストプレーするために位置しそれを完全に生かしてシュートに結びつけた。

ポストプレーヤーとしては世界一といわれるポポビッチが来日できなかったので新人のセルダルジッチを入れていたが強引なポストプレーは立派に代役を果たしていた。

シュートとは決めるものだと信じ切っていて無駄なく自分より条件のよいシューターがいたら必らずそこにパスを送りシュートさせる点も見習いたい。又ノーマークの時には日本人のように全力でシュートする前にまずキーパーを良く判断してからシュートする余裕がみられた。

湧永薬品は試合開始から高橋の速攻、木野を中心としたローリングオフェンスで相手をおびやかし13分まで6－3とリードし自己のペースを保ったのはよかった。

然しその後スケールの大きいゲームに体力を使い果たし、へばりもてつだって前、後半とも中頃より精彩を欠き攻撃には変化がなく防御の動きが止まったことは今後の研究課題である。

壁の高いディフェンスに対しシュートを横の変化でするとか、サイドの空間を利用したスカイプレーを組立てたり又ロングシュートをねらうことも必要である。

（大阪協会副理事長、前日本協会オリンピック対策部長）

ラザレビッチ選手訪問

——学校で習ったり、本や写真でしか知り得なかった日本に来られて実に嬉しかった。この上なく組織化された社会、よく訓練され忙しげに働く人々。それはのんびりした我国に比べ驚くべきことだった。また、極めてモダーンな建物や生活用具が多いのにもびっくりした。短期間のため京都、名古屋など史跡をじっくり鑑賞できなかったのが残念である。

また、日本人の生活の中にハンドボールがどのように溶けこんでいるかも知りたかった。

ところで、我々は数年前まで日本のハンドボールにある意味のコンプレックスを感じていた。

その後、我々は非常な研究と努力を重ね、ミュンヘンで日本に勝ち劣等感が一気にとれた。オリンピックで日本に勝ったことが、ユーゴのハンドボールに大きな転機をもたらせた、ともいえる。

日本は研究熱心で、良いハンドボールと悪いハンドボールを区別できる能力があるから、やがて今よりレベルアップして、再びユーゴの前に立ちはだかるだろう。

日本には小柄で俊敏な選手は沢山いるが、大型、長身者に人を得ていない。そのため、フリースローラインの外側に日本選手が居る時は、なんら恐威を感じさせず、警戒心をおこさせない。遠い地点から、強い弾丸のようなシュートを射つ選手が3人は居なければ、小柄で優秀な選手たちも結局は活きてこない。

ディフェンスもブロックする力（パワー）に不足している。

ユーゴは全員が相手の動きを封じるのにつねに忠実だし、どのようなシュートでもストップさせる自信がある。今回の対戦で、日本は我々のディフェンスから、大いに得るところがあったハズだ。

全日本の選手は、いたずらに、技巧に走らず、徹底したからだづくりのトレーニングをすべきだ。菊池や蒲生が、この点を自覚すれば、ロングシューター不足という日本の悩みは解決すると思う。

今回の対戦では、どの会場も満員となり、シリーズへの関心が高いことが判り嬉しかった。

しかし、観客層が生徒や学生に偏っていた。老若男女を問わず広い層の観客にハンドボールのよさを宣伝する必要があろう。ハンドボールが、若者だけのスポーツであってはならない。

年長者を会場へ誘うことが、ハンドボールを世界のスポーツに成長させる一つの条件だ。

そのためには、全日本の選手がすばらしいプレーをみせることが最善である。また当然、彼らはその努力をすべきだ——。

（アルスラナジッチ、ホルバット、ラザレビッチ選手の訪問企画には日本協会国際委・光島磯雄、久田暁、一宮昌平各氏の協力を得ました。編集部）

ユーゴ　驚異的なゲームスタミナ

蒲生（中大）の4ゴール光る

最終戦（第6戦）は、全日本との第2回戦、公式国際試合として、9日午後1時25分から京都府立体育館で行なわれた。審判＝岡本克彰、稲石三一、計時員＝藤本昇、記録員＝寺岡紀夫、観衆＝約三千五百。

ユーゴスラビア 23（9−4、14−10）14 全日本

得	【ユーゴスラビア】		【全日本】	得
0	アルスラナジッチ	GK	本田（大阪イーグルス）	0
0	ニムス	GK	斉藤（日体大）	0
3	ボクラヤク	FP	木野（湧永薬品）	1
3	ミスコビッチ	FP	中村（大阪体大）	2
4	ブリバニッチ	FP	藤中（大同製鋼）	2
0	ファイフリッチ	FP	氷海（千葉教員ク）	2
3	ミルヤク	FP	大江（三菱レ大竹）	2
1	ブガルスキー	FP	飯田（大崎電気）	0
4	ホルバット	FP	佐藤（本田技研鈴鹿）	1
1	セルダルジッチ	FP	菊池（早大）	0
3	ラブルニッチ	FP	蒲生（中大）	4
1	ラザレビッチ	FP	早川（大阪イーグルス）	0
23	(2)	7MT	(2)	14

観戦記

杉山　茂（NHK運動部）

結果論かも知れないが、この試合の明暗を決めたのは、前半24分50秒、佐藤の放ったアンダーシュートをアルスラナジッチが阻止したプレーにあったと思う。

戦況は4−7、いきなり0−4とリードされた日本が、じわじわと盛り返し点差をつめ、むしろペースは日本に傾きかけた時である。セットから、左45度の佐藤が狙った足元への一発は、待ち構えたアルスラナジッチの正面をついた。

それまで、日本の攻撃は、長い時は1分30秒近く、早くても40〜60秒かかって、丹念にボールを廻していたのだが、この時だけは、実に仕掛けが早かった。

勢いにのりすぎての射ち急ぎ、といったらば酷かもしれないが、ビッグゲームは、こうした微妙なワンプレーで、その後の局面が大きく変わってしまうものなのだ。

この場をもちこたえたユーゴは、すかさず26分50秒ミスコビッチ、26分50秒ラブルニッチとたたみかけ、9−4。ユーゴは例によって直線的な速攻にサイドからの変化技をミックスさせ、立ちあがりから日本をおそった。スターティング・メンバー（FP）は、ボクラヤク、ミスコビッチ、ブリバニッチ、ファイフリッチ、ミルヤク、ブガルスキー。平均身長184㎝と、来日メンバーの中ではもっとも〝小柄なスタッフ〟だったが、決め技の多彩さと、スピードは巨砲陣とはちがった味がある。

GKからのワンパス速攻、出足をともなった詰めからのカットー独走、ダブルポストによる相手守備陣のかく乱……。考えてみればこのようなプレーは、すべて日本のお家芸ではなかったか。

それに、ユーゴは、防禦から攻撃、攻撃から防禦への切り替えが実に速くそのスピードが60分間、まったく同じなことには驚嘆させられた。

ゲームスタミナの差をこれほどはっきり露した国際試合は初めてである。

日本も悪い材料ばかりではなかった。特に、蒲生が後半4ゴールした思い切りのよいプレーはみごとである。ベンチも、彼自身も今後に自信をもてたハズだ。

第6戦・今回のシリーズで藤中（№13. 大同）の活躍は一きわ光るものがあった。（撮影・光島微雄）

技術評

小西　博喜

オリンピックの1位と11位、そのままの力量差が、すべての面で出た一戦である。

特に強烈な印象を与えたのはユーゴの体力、気力だ。試合開始から終了のホイッスルまで、彼らはイキを抜くことがない。

それに比べて全日本は、完全にスタミナ不足だった。

第1戦でユーゴの実力を改めて知らされた全日本が、どのような立ちなおりを示すか、興味深かったのだが、底流となるべき〝活力〟が欠けては、正直のところ、なす術（すべ）がない、といってもよいだろう。当然、それはスピードの優劣という決定的な差にあらわれてくる。

特に、なだれこむような直線速攻は、迫力に満ち、日本はディフェンス態勢を満足に布くことさえできない面がしばしばあった。

しかも、ユーゴは、ただ走り、突き進むのではなく、全選手が己れの立ち場（ポジション）をよくわきまえている。

パスコース、走るコースとタイミングのよさは、もうそれだけで一つのフォーメーションプレーとしての効果を、相手守備陣に影響させるのだ。

定評のあるディフェンス。つねに全員が一本の糸で結ばれたように動き、おそらくベンチからホルバット又はポクラヤクという指示系統によるであろう臨機応変のシフトは鮮やかであった。スピードの落ちないフットワークが、そのベースになっていることはもちろんである。

GKアルスラナジッチの存在も大きい。彼とFPとの連けいで、相手のシュートを誘いこむプレーをみせた。野球で云えば「打たせて捕る」といったところだ。

全日本は、やはり、新旧の間のコンビネーションがまだ整っていない。即時編成の弊ともいえるが若手がのびのびとしたプレーを見せたのは希望がもてる。

蒲生、菊池、夏目ら大型新人が精進をつづければ、日本は看板の「技」に、待望の「力」をプラスさせることができるわけだ。

中央攻撃、高打点攻撃の威力をユーゴはまざまざと見せつけたが彼らは、サイド、ポストからの技巧を、うまく織りこんでいる。

この面では、日本もスカイプレーなどの空間パスを駆使して互角とみたい。

スタミナづくりと大型化。モントリオールまであと3年、全日本の課題は、はっきりしたと思うのだが――。

（京都協会理事長）

日本・ユーゴ②
ランニングスコア

	【日本】	【ユーゴ】
前半		
2分40秒		①ミルヤク(7)
4分20秒		②ブリパニッチ
5分50秒		③ブリパニッチ
7分20秒		④ポクラヤク
8分20秒	①木野	
10分	②藤中(7)	
11分55秒		⑤ホルバット
13分35秒		⑥ブリパニッチ
17分20秒		⑦ブリパニッチ
18分30秒	③氷海	
21分	④中村	
25分40秒		⑧ミスコビッチ
26分50秒		⑨ラブルニッチ
後半		
1分30秒		⑩ホルバット
2分30秒		⑪ポクラヤク
4分44秒		⑫ポクラヤク
5分25秒	⑤蒲生	
6分10秒		⑬ホルバット
7分15秒	⑥蒲生	
7分45秒		⑭ホルバット
10分35秒		⑮ミルヤク
11分15秒	⑦蒲生	
14分50秒	⑧藤中	
16分30秒	⑨中村(7)	
17分01秒		⑯ラブルニッチ
20分	⑩佐藤	
20分30秒		⑰ファイフリッチ
21分30秒	⑪蒲生	
22分		⑱ブガルスキー
23分20秒		⑲ミスコビッチ
24分		⑳ミルヤク
24分40秒	⑫大江	
25分15秒		㉑ホルバット
26分10秒	⑬氷海	
27分10秒	⑭大江	
28分04秒		㉒ラブルニッチ(7)
29分50秒		㉓セルダルジッチ

木野、41公式試合に得点

全日本・木野実選手（立大―湧永薬品）が続けている公式国際試合の連続得点記録は、同選手がデビューした41年9月の中国戦（駒沢）以来、今回のユーゴ戦2試合までで41試合155ゴールに伸びた。

全日本男子54試合目の公式戦

全日本男子の公式国際試合（7人制）は、ユーゴシリーズ（2試合）を終って54戦となり、成績は21勝3分30敗とかわった。

ユーゴとは通算5戦1勝1分3敗。

日本国内における通算成績は11戦（スウェーデン4、ユーゴ、イスラエル、韓国各2、中国1）5勝6敗である。

ユーゴ、五輪後も好調

ユーゴナショナルチームは、ミュンヘンオリンピック後、日本遠征までに公式戦10試合を、いずれも自国で行なっており、ルーマニアに1敗、東ドイツ、ソビエトに引き分けただけ。日本での2勝を加えて12戦9勝2分1敗と好調を示している。なお、本誌の調べでは、ユーゴは日本戦を終えて公式国際試合数は188となり成績は106勝20分62敗。

本誌では次号にも「ユーゴ特集」を予定しています。投稿を期待します。

日本を去るにあたって

ユーゴスラビア監督 イワン・スノイ

…飛行機にゆられること30時間長い旅であった。しかし、羽田で、見覚えのある荒川日本協会理事長ら、日本の関係者の顔を見た時、私は「来てよかった」と思った。

我々は過去、日本とまったく五角の成績であった。1勝1分1敗、今回の来日を「日本との決勝だ」と私は云い、選手たちも充分それを理解した。

我々は、はじめのうち、日本の技術を吸収するのに一生懸命だった。速く、そして戦闘的な日本のプレーを一生懸命学んだものである。それまでのヨーロッパの試合と言えば「ゆっくり攻める、ゆっくり攻める」であったのだが、日本は美しいほど速かった。

その日本と日本で試合ができる。——すばらしいことであった。

日本遠征は大目標の一過程

フジヤマ、キョウト。日本には魅力的な場所が多い。しかし我々は観光が目的で旅をして来たのではない。5ケ月後にせまった世界選手権、そしてモントリオールまであと3年だ。

母国の人たちは、ユーゴのハンドボールチームが負けるなどとは思っていない。それに応えるためには毎日々々、トレーニングトレーニングをつづける以外に道はない。

世界選手権で勝ち、モントリオールで勝つために、日本遠征は重大な意味をもつ〝一過程〟であった。

その試錬を6戦全勝で飾り得たことに私は満足している。

自分の役割に全力を

ところで、今回、日本チームと接して、私はいささか意外な印象をうけた。

かつての全日本は、より多くボールに触ろうとして努力を惜しまなかった。それがヨーロッパの関係者を驚嘆させたスピードプレーを生む一因になっていたものだ。そのよさを今は失っている。

動きの速さは相変らずだが、プレイヤーたちの位置のとりかたが以前に劣る。自分の役割を全力つくして果たそうとする気迫がない。この点すばらしいのはGK本田だ。彼のように全員が、自分の立ち場を認識すれば、日本は十分に、世界の頂点へ立ち得る力があると思う。

FPでは、木野が常に考えたプレーをし、藤巾の闘志を裏打ちにしたシャープな動きが目についた。頭脳的なプレーと闘志これこそ、一流選手の〝条件〟である。特に、若手にそれを云いたい。

「変型1・5」は近藤封じ

全日本が、新旧交替の時期にあることは聞いた。一口でいうが、これは難事業だ。

若く、新しい全日本は、木野や近森や近藤（信行選手、元大崎電気）たちの持っている激しさ、速さ、頭脳を受け継ぐ努力を惜しんではならない。

余談になるが、私は、これまで日本の生んだ最高のプレイヤーは近藤信行であると思う。

実は、彼がミュンヘンに参加するものと思い、そのシャープで臨機応変の攻撃を封じるために考えだしたのが「変型1・5シフト」である（編集部注・通常1・5ディフェンスのトップは中央に位置するが、変型は、思い切ってトップが左右どちらかのサイドラインに近づき、5人の列と直角になるような姿勢で守る）。

身につけよ守りの力

日本チームの欠点の一つとして、守りのもろさがあげられる。

極端に云えば、ハンドボールは1対0で勝てるスポーツなのだ。守りの力を持たない選手を、ナショナルは必要としない。

この点、日本選手は、防禦力と攻撃力がアンバランスだ。

もっと激しく、そしてもっと強く相手の攻撃者を封じる動きを示さなくてはいけない。そのための体力、柔軟性の養成を日頃から考えるべきだ。強く激しくというのは「荒く」ということをいっているのではない。

誤解しないで欲しい。

いつまでも好敵手・日本

次の機会に出会った時、日本の実力が驚くほどになっていて欲しいものである。

多くのものを教えてくれた日本。いつまでも我々にとって好敵手であることを、今回の遠征で確認したのも事実である。

生涯忘れることのできないすばらしい13日間、改めて日本のハンドボールファン、すべての関係者の示された友情と、ゆきとどいた親切に心から感謝のことばを述べたい。（談、文責・編集部。写真下の凸版はスノイ氏のサイン）

イワン・スノイ 「すべてハンドボールのためにする男」といわれる情熱家。一九二三年生まれ、すでにユーゴナショナルの監督を22年間つとめている。職業は専門学校のスポーツ教官。

ユーゴ戦に拾う

□…各地のファンをたんのうさせたユーゴチームだが、一点の失望は、名ポストマン、N・ポポビッチが来日しなかったこと。1m81、日本選手と同型で欧州通に言わせると、彼のプレーこそ我が国に示唆するものがもっとも大きかったハズ、という。不参加の理由は、9月10日から医師になる試験が始まるためで、スノイ監督は「日本のファンには申訳けないが、彼の将来を考えた」という。

□…一方、全日本の野田清選手（大同製鋼）も、社内の責任ある立ち場から、どうしても抜けることができず、東京、京都大会に欠場した。

ミュンヘン後、仕事とハンドボール（全日本）の両立に悩んでいた野田だけに、今回も「苦しんだあげくの結論」と周囲は暖かい目でみている。

□…両名手ともいかにもアマチュアらしい欠席届ではなかろうか。

▽…開場と同時に続々とファンが詰めかけた。都外ナンバーの大型バスも二台、三台と乗りつけてくる……。9月1日の東京体育館。開会式の時には五千二百九十の座席はみごとに埋まった＝**カット写真**。

▽…「東京は入らない」というのが、最近のかんばしくない定評だった。あのオリンピックアジア予選でさえ空席が目立った

今回は、アジア予選と同よう日本協会の自主興行。いっそ東京をはなれてと、静岡や横浜での開催も打診されたほど。

▽…義務販売いっさいなし全券予約制を発表した時「ますます不入りになる……」という批判の声もあったが、運営委員を兼ねた荒川理事長ら執行部はあえてそれを強行した。団体動員ゼロ。心からハンドボールを愛し、ハンドボールを見たい人が集まったといえる第一戦の賑いであった。

◇…「僕はまったくラッキー」というのはZ・ラデノビッチ選手（FP）。

ソビエト戦（7月）で右手を骨折したオリンピック代表、Mカラリッチ選手の回復が思わしくないため急に来日メンバーに加わったもので、ハンガリー遠征のナショナルBチームから呼びよせられた。

◇…日本協会でも、飛行機の乗客リストを見て変更を知ったが、ユーゴ側もよほど急いだとみえて、彼に合うユニホームがなく、予備に持参したGKの控え用〝12番〟で全試合を通した。

◇…このような騒ぎをよそにラデノビッチは、つかんだチャンスをモノにしようと、出番が来ると大変な張り切りよう。全日本戦（公式試合）には出場の機会に恵まれなかったが、他の4戦では7点をあげた。BからAへ昇格の厳しさをまのあたりにみせた一駒である。

○…地道な活動ながら、着実な成果をあげている日本協会普及指導部調査班が、ユーゴ選手の体力測定を8月31日、東京渋谷の東大教養学部で行なった。

○…ホレボレするような筋肉美をみせて、選手たちは次々と〝貴重な資料〟を示したが、公式報告の前に、興味ある数字（最高値）のいくつかを拾い出してみると――、▽垂直跳 セルダルジッチ63cm、▽握力 ニムヌ 右77、左68kg、▽背筋力 ミルヤク252kg、▽50m走 ラザレビッチ、ポクラヤクともに6.5秒。驚異的なのはボールスピード(ただし初速)。ミルヤクが秒速27mをマークしたほか、全員の平均23・8mというすごさ。ラザレビッチは24・2、ラブルニッチは23・1だった。

○…「日本のハンドボールのためになるなら……」と快諾してくれたこの調査、いずれ全容を本誌で紹介したい。

ユーゴ戦に拾う

日本勢、奥さんチームねじふす

ラインハウゼン（西独）1勝にとどまる

西ドイツ女子クラブ「ラインハウゼン・オリンピック・スポーツクラブ」（ボルヘファー団長ら役員7、選手13）は9月13日福岡国際空港着で来日。熊本、岐阜、東京、水海道の各都市で、国内トップレベルの単独実業団と5試合を行い、1勝4敗だった。

今秋から西ドイツの最上級リーグへ進出したチームとあって、その試合ぶりが期待されたが、女子スポーツに対する考えかたの根本的な違いからか、内容的には低調で、わずかに東京重機（第4戦）戦で気力を示しただけ、ファンや関係者を落たんさせた。

しかし、主婦を中心とし、日常生活のなかにハンドボールを溶けこませ、心からこのスポーツを楽しむラインハウゼンの〝行きかた〟には、多くの注目が集まり、市民スポーツへの浸透を企る日本ハンドボール界に一つのサンプルを示した、ともいえた。一行は9月24日夜羽田から帰途についた。（本誌では次号にも「ラインハウゼン特集」を予定。）

○……グラーベン監督は目を丸くした「なんだって！ 日本のチームは一週間6日も練習する？ 我々は一週間1日、それも2時間しかしないというのに……」

今度は、日本側がびっくりする番だった。「一週2時間ばかりで西ドイツのトップクラスにどうして入れるのか。」「あなたがたは、西ドイツの西部地域1部ではなかったのか。」「来日直前、西ドイツチャンピオン、アイントラクト・ミンデンを破ったと聞いているが」――。

「どれも事実さ」。グラーベン氏は65才の老顔をこわばらせながら言ったものだ。

○……同行したスポーツリポーター、W・バーテル氏（ヘルガ・バーテル選手のご主人）はこう説明する。

「西ドイツの女子界には、男子のような全国リーグ（ブンデス・リーガ）はない。国内を五つの地域に分け、それが「一部」（リギョナル・リーガ）。その下にいくつもの地方リーグや市町リーグがあるのは男子と同じ。ラインハウゼンは今シーズンから久しぶりに西部地域リーグ（リギョナル・ウェスト）へカムバックした。しかし西ドイツの女子クラブで、どこに出しても恥ずかしくないのはFC・ニュウルンベルグ、TSV・グットムス、アイントラクト・ミンデン、HT16ハンブルグ、グルンバイス・フランクフルトの5クラブぐらいのもの。あとはラインハウゼンと同じレベルだ。だけど我々はちっとも弱いとは思っていない。」

○……グラーベン監督は「日本チームはアマチュアか」とも聞いた

25年近く西ドイツ女子ナショナルのコーチングスタッフとして活躍した同氏だが、日本にこれほど強い単独チームがあるとは（しかも5チームも……）思わなかったらしい。

「もちろんアマチュアだ。西ドイツナショナルだって、すばらしい選手を集めているではないか。（注・日本×西ドイツ女子ナショナルの過去の対戦成績は、日本の5戦1勝4敗）」という日本協会役員の返答と質問に、グラーベン氏はいとも明快に答えた。「ナショナルチームは、別のアマチュア、さ。」

○……このあたりの事情を、来日選手のうち、ただ一人のナショナルプレイヤー、ギーザラ・ゲールテン選手(GK)に聞いてみよう。

「現在、西ドイツの優秀な女子選手は特定クラブに片寄っています。その他のクラブからナショナルに選ばれた選手には1ケ月単位の「個人練習課程」がコーチ団から送られて来ます。その選手は、それにしたがって、毎日一人で練習を積むのです。そして合宿（3～5日間）で成果がテストされます。男子ほどでないにしろ、合宿などの経費は一切協会負担で休業補償もあります。しかし、西ドイツナショナルは年々力が落ちる一方でこのままでは今冬の世界選手権では好成績を望めずモントリオールにも行けないでしょう。」

○……日本側が、ラインハウゼンの〝実力〟に驚いたのと同じように彼女らは彼女らで、日本チームの〝実情〟は奇怪でさえあったらしい。

「日光浴以外の方法で、ましてハンドボールで女の子があんなに陽にやけるとは思わなかった。」

「一週のうち6日間も、仕事とハンドボールをやるんですって？」

「クラブのスポンサーに企業がなるのではなく、ハンドボールをするために企業に入る？ どういうこと、それ。」「若い時、それだけ打ちこみながら結婚するとハンドボールをやめてしまうのはなぜなの」――。

来日中、ラインハウゼンは〝奥さんチーム〟として、報道陣の注目をあびた。彼女らにはそれがどうしても判らない。

○……スポーツ観の違い、といってしまえば、それまでだ。

西ドイツの女子は、ハンドボールを「体育」「健康」「美容」の手段としてとらえ、勝負は二の次なのである。勝負に目の色を変えるのは、比較的女子に人気のある地方のクラブか、ナショナルチームだけ。ラインハウゼンはそれらとはっきり一線を引き、ハンドボールを楽しむ集まりに徹している。部員数50人。来日メンバーは、そのなかからえりすぐった〝精鋭〟だ。ママさんを含む主婦選手7人平均年齢26・7才……。

○……バーテル氏も「ラインハウゼンは、特にそうした傾向が強調されているクラブの一つだ。選手たちは、ハンドボールを通じて外国遠征できるのを唯一の楽しみにしており、毎シーズン、ヨーロッパのどこかへ行っている。日本遠征は大きな夢で全員2年前から貯金してきた」という。

そして「せっかく日本に行くならよい成績で、と頑張ったおかげか、去年はニーデルハイン地区リ

ーグで優勝（16戦11勝2分2敗）今年から西部の一部へ昇格できた」ともいった。
　彼女らはそれでいいだろう。むしろ、羨しい〝環境〟だ。
だが、6年ぶりの本場チーム、12月の世界選手権を前に、かっこうの頂点強化と気負いこんだ日本協会は、完全に拍子ぬけの態である。

事前調査は十分だったが

○……実は、ラインハウゼンが、日本遠征を希望して来たのは、6年前にさかのぼる。
　西ドイツ西部では名門というだけで詳細が判らぬまま月日が経った。46年くれ、全日本女子が久々にヨーロッパへ遠征した時、再び強い来日希望が伝えられた。それからまた2年余が経ち、日本協会はあらゆるデーターを集めて検討招待（滞在費のみ日本側）に踏み切った。
　雑誌や書類だけでは心配だとばかり4月来日のFA・ギョッピンゲンの役員や、観光で来日した元西ドイツナショナルの名手、W・シェドリッヒ氏（昭31来日メンバー）をホテルにわざわざ訪ねて、

▽第1戦（9月15日16時・熊本市体育館、観衆約三千）

大洋デパート（熊本）18（6－2、12－1）3 ラインハウゼン

得	【大洋】		【ラインハウゼン】	得
0	小原	GK	ゲールテン	0
0	森山	GK	メニング	0
1	米	FP	コールテ	1
3	垂水	FP	リートホーベム	0
5	山下	FP	クーツェローワ	0
4	島田	FP	ビーゼ	0
3	蔵田	FP	ボークホルト	0
1	加子崎	FP	パーテルス	0
0	植原	FP	ピンクラー	0
0	石井	FP	シュースター	0
0	篠田	FP	ストリービッシ	2
1	矢田	FP	グラーベン	0
18	(1)	7MT	(2)	3

（審・中西、森）

○……ラインハウゼン（OSCR）は、立ちあがり4分7MTで先行したが、そのあとは、大洋の速攻にぼう然と立ちつくす不甲斐なさ
　大洋は、いったんペースをつかむと、島田、山下らが容しゃなく攻め立て、守りでも鋭い出足で、OSCRにつけいるスキを与えなかった。試合後、グラーベン監督は「大洋の攻撃時に見せるボディチェックは妨害行為（反則）だ」と不満をあらわした。

▽第2戦（9月17日18時30分・岐阜県民体育館、観衆約二千五百）

田村紡（三重）12（4－3、8－3）6 ラインハウゼン

得	【田村】		【ラインハウゼン】	得
0	久保	GK	ゲールテン	0
0	岡	GK	メニング	0
1	三毛	FP	クーツェローワ	0
3	松下	FP	リートホーベム	0
2	横山	FP	コールテ	5
2	金田伴	FP	ボークホルト	0
1	辻	FP	パーテルス	0
2	鈴木	FP	ピンクラー	0
0	金田孝	FP	シュースター	0
0	沖	FP	ストリービッシ	0
0	落合	FP	ビーゼ	0
1	和久井	FP	グラーベン	1
12	(1)	7MT	(0)	6

（審・鈴木、橋石）

○……OSCRは、立ちあがりもたつき気味の田村紡を攻めて2点を先取したが、10分をすぎる頃から、田村紡は動きがなめらかとなり、あっさり主導権を奪いかえした。
　後半も、松下、三毛を中心にスピードのある攻撃で押しまくり、一方的な展開となった。
　OSCRは、180cmのコールテをポストに置くなど、反撃を試みたがスピード差がありすぎた。

▽第3戦（9月18日18時30分・駒沢屋内球技場、観衆約一千五百）

大崎電気（埼玉）15（7－1、8－3）4 ラインハウゼン

得	【大崎】		【ラインハウゼン】	得
0	和田	GK	ゲールテン	0
0	西村	GK	メニング	0
3	佐藤	FP	クーツェローワ	3
5	岩井	FP	コールテ	1
2	席定	FP	リートホーベム	0
2	長谷川	FP	ボークホルト	0
0	安野	FP	ビーゼ	0
0	内野	FP	バールテルス	0
2	大場	FP	ピンクラー	0
0	杉尾	FP	シュースター	0
1	深堀	FP	ストリービッシ	0
		FP	グラーベン	0
15	(0)	7MT	(0)	4

（審・佐野、安藤）

○……守りの要・ゲールテン（GK）が前夜、負傷したOSCRはいきなり大崎の速攻に7点を奪われて戦意をなくしてしまった。
　大崎は小さく速いパスをつないで相手ディフェンスをゆさぶり、佐藤、岩井の左右コンビが好シュートを連発、スピード、タイミングとも申し分なかった。OSCRで光ったのは後半15分40秒クーツェローワのみせた跳びあがりながらのバックハンドシュートだけ。

▽第4戦（9月21日18時30分・駒沢体育館、観衆約一千五百）

ラインハウゼン 10（4－3、6－6）9 東京重機（東京）

得	【重機】		【ラインハウゼン】	得
0	三紙	GK	メニング	0
0	柘植	GK	ゲールテン	0
2	牧野	FP	クーツェローワ	1
2	古佐原	FP	パーテルス	1
1	市川	FP	ビーゼ	0
1	鈴木	FP	リートホーベム	0
0	折口	FP	コールテ	5
1	菊池	FP	ボークホルト	0
0	村上	FP	ピンクラー	0
0	岡部	FP	シュースター	0
2	生井	FP	ストリービッシ	2
0	渡辺	FP	グラーベン	1
9	(0)	7MT	(3)	10

（審・大塚、岡前）

○……重機が全日本1位（47年度）と聞いて闘志を燃やしたOSCRは、GKゲールテンの沈着な動きと、コールテの巧みなポスト攻撃ストリービッシの好守で初の1勝をあげた。
　重機は、速攻、ポストともさえず、しかも相手の荒い守りにペースを乱され、特に終盤は焦るばかりで、プレーが強引すぎた。
　OSCRが徹底的な遅攻で、日本の速さをかわしたのは老巧。

▽第5戦＝最終戦（9月22日・茨城県水海道二高体育館、観衆二千）

日本ビクター（茨城）11（4－3、7－2）5 ラインハウゼン

得	【日ビ】		【ラインハウゼン】	得
0	渡辺	GK	ゲールテン	0
0	鈴木	GK	メニング	0
2	高野	FP	コールテ	0
3	谷沢	FP	リートホーベム	0
0	加藤	FP	クーツェローワ	2
3	額賀	FP	ビーゼ	0
0	滝	FP	ボークホルト	0
2	蓮見	FP	パーテルス	0
1	池田	FP	ピンクラー	0
0	阿部	FP	シュースター	0
0	川崎	FP	ストリービッシ	2
0	滝本	FP	グラーベン	1
11	(0)	7MT	(1)	5

（審・山内、斉藤）

○……ビクターが押し気味だったが、OSCRは中央部を長身選手で固める守りで粘り、せりあいとなった。
　しかし、後半になるとビクターのタテへの攻撃が威力を発揮、脚力の差も次第にあらわれた。活躍が目立ったのはGK鈴木。冷静な守りのほか、速攻への好パスアウトで得点機をつくった。OSCRは後半、コールテが負傷欠場したのがひびいた。

ラインハウゼンの戦力を聞いた。いずれも答えは「いいチームだ。ナショナルプレイヤーもいるハズ」……。

すっかり自信をもった日本協会は、ユーゴと併せて9月は、まさにゴールデン・マンスリー（黄金月間）と宣伝したわけである。

○……ところが、西ドイツ球界がこのところ、まったく女子の強化を棚あげにしている事実はどこからも〝入手〟できなかった。ボルヘファー団長（ゲールテン選手の実父）は憮然として「ナショナルの監督になり手がいない。先シーズンの西ドイツ決勝も観客が千人しか集まらなかった。西ドイツ協会は男子の王座復帰に懸命で、女子はどうでもいいらしい。」

○……「それにしても弱い」というのは安藤、光島両日本協会常務理事と一宮国際委員。3氏とも西ドイツ生活を経験、あちらのハンドボール界の消息には詳しい。

西ドイツ女子の〝健康第一主義〟を身近かに知ってはいたが、「ハンブルグ市内リーグあたりのほうがまだマシ」（安藤常務理事）と苦々しい顔だし、「共産圏以外の国から女子を招く場合は、やはりナショナル又はそれに準ずるチームでなくてはダメ」（一宮委員）「日本勢の圧勝は西ドイツ側への警鐘になった。場合によっては、西ドイツ協会と交流協定をしたほうがいい」（光島常務理事）ということになる。

○……それでは、ラインハウゼンの来日はなんのプラスにもならなかったのだろうか。

来日前から評判の高かったクーツェローワ、コールテ、GKゲールテンらはやはり、日本選手にはない力と技を示した。

特に、左腕クーツェローワは、かつてチェコ・ナショナルに在籍したこともあるだけに、鮮やかな攻守を見せ、なかでも走高とびの背面とびのように後向きに体をジャンプしてそらせながら逆手（さかて）からシュートを決めるプレーは満場をどよめかし、「あれだけで招待の意義は十分」という声もあったほど。ヨーロッパでは4、5年前から一部で行われているというが、日本では男女を通じて初めて見る快技だ。このほか、全試合フルタイム出場したストリーピッシの精かんなプレーとドリブルの巧さも光ったし、どこの会場でも「日本の女子があの年令であれだけのプレーができるだろうか」という驚嘆の声があがった。

OSC・ラインハウゼン 来日選手団名簿

・団　長	W. ボルヘファー	(57)
・監　督	F. a.d.グラーベン	(65)
・助監督	H. ゲールテン	(28)
・トレーナー	H. ボークホルト	(32)
・渉　外	W. バーテルス	(30)

	年令	身長 cm	体重 kg
・GK			
G. ゲールテン	(26)	167	58
H. メニング	(21)	164	56
・FP			
L. クーツェローワ	(27)	168	60
A. コールテ	(30)	180	65
R. リートホーベム	(32)	168	73
D. ボークホルト	(30)	165	58
A. ヴィーゼ	(27)	166	57
H. バーテルス	(28)	160	52
E. ヴィンクラー	(32)	176	64
M. a.d.グラーベン	(24)	168	57
G. シュースター	(20)	165	60
U. ストリーピッシ	(31)	165	60
C. ステファーン	(20)	175	78

役　員	E. エデール	OSCR女子体育委員
	K. グラーベン	(監督夫人)

普及活動にヒント

○……日本協会・杉山企画担当常務理事は、「弱かった。リサーチ不足」を認めながらも招いたメリットをこう評価する。

「正直のところ冷水をかけられた感じ。国際試合というと勝負ばかりを気にし、頂点強化のみにうつつをぬかしすぎた。

女子に限って、今回のようなチームが今後も来たいというなら、日本側もいわゆるクラブ、一般OGを相手に考えたい。滞在費の分担金捻出（今回は1会場50万円）に苦しむが、将来は普及対策の一環として予算化することもいいだろう。」

○……たしかに、ラインハウゼンは日本ハンドボール界に、これまでの外来チームとはちがった〝おみやげ〟を残していってくれた。

対戦したある実業団選手は、はっきりと「私のハンドボール観が変わりました」といっているし、「あまり弱そうなので見に行く予定をとりやめたが、新聞で実態を知り、むしろ関心が高まりました。クラブの構成運営など教えて下さい。」（東京・佐藤恭子さん）というOGからの手紙が本誌あてに届けられてもいる。

○……1勝4敗、総得点28、総失点65。低調な成績に終わりながら彼女らの表情はさっぱりしている。「楽しみながら勝てるにこしたことはない」（コールテ選手）。

1勝した東京重機戦（21日・駒沢）。「全日本のチャンピオンだし……」とグラーベン監督は、だいぶハッパをかけたらしいが、ヴィーゼ選手を通じると、「どうせ1勝ぐらいで終るなら、いちばん強いところからということになったのよ」になる。同じ条件、同じ考えの仲間たちによる一部リーグは10月3日から開幕だ。

陽気なシュースター選手はいったものである。「リーグで勝つより、他のクラブの選手に日本遠征のみやげ話を聞かせて楽しがらせるのが楽しみだなあ……。」（Z）

安藤、佐野両氏を派遣
国際審判会議

日本協会は、10月7日から13日まで、ブルガリアのヴァルナで開かれる「IHF（国際ハンドボール連盟）中央規則審判講習会」に安藤純光（45才、日本協会常務理事・審判部長、国際公認審判員、法大出法大教授）と佐野和夫（44才、国際公認審判員、東京教大出、都立秋川高教諭）の両氏を派遣することに決め、発表した。今回の会議は多発気味の反則対策、新しい競技規則の研究などが中心となる。

日本協会が、IHF主催の審判関係会議に代表を公式派遣するのは3度目のこと。両氏は10月4日出発の予定。（写真上　安藤、同下　佐野氏）

西軍男子、4年ぶりの快勝

女子は東軍が大勝

恒例のオールスターズ・ゲーム第23回（女子第5回）全日本学生選抜東西対抗戦は、9月15日午後1時30分から、二千人近いファンを集めた名古屋・愛知県体育館で行なわれた。男子は接戦となったが、西軍が前半27分から一気に逆転、4年ぶりの勝利を飾った。

女子は、予想どおり東軍が一方的に押しまくり4連勝。

男子

これまでは、つねに速攻の東軍にセットの西軍がどう戦うか、がポイントであった。しかし、今回は発表された顔触れから、私はこの見方がそのまま当てはまらないとみた。それは強肩大砲の穂積、津川に、攻撃の中村、守備の夏目、GK福井を配した西軍と、法政を軸に、巨漢菊池、巧者山村を加えた東軍とでは、全く互角の力と思えたからである。

ゲームの初めは緊張感と堅さがみられ、両軍共好調なスタートとは言えなかった。一進一退のゲーム運びから先取点は東軍があげた。東軍はボールを左に集め、4分左サイドからの飛び込み、5分リバウンドのフォロー、そして7分左45度から、いずれも川島がゲットして3対0。このあたり左サイドを得意とする川島のマークが甘かった。ここで浮き足立つかに見えた西軍は、8分中村のフリースローと9分穂積のゲットで2点を挽回して食い下がりをみせ、さらに14分東軍の7米スローをGK穴倉が阻んで士気を盛り上げた。その後は両軍の動きもよくなり、26分6−6から西軍は、フォーメーションプレイとスカイプレイで勝ち越しの2点をあげて前半を終わった。

前半の見どころは、残り10分間で5点を取った西軍の果敢な攻撃であった。

東軍の追い込みに興味を繋いだ後半は、守りの布陣でスタートした西軍の作戦が当り、10分までに5点差と引き離され期待はずれの結果であった。その後はやや焦りの見えた東軍に対し、西軍ベンチは巧みなメンバーチェンジから、守り、速攻、フォーメーションプレイなど、選手の力をフルに発揮させた。見事な釆配ぶりといえる。それに後半8分から10分間をシャットアウトした守りも勝因。

女子

東軍の勝因は、前後半を通じて西軍を上回ったスピードプレイであり、その中心が好リードマンの畑中、蔭の立役者として切れのよいプレイをみせた岩本、ロングシューターの坂本、セイビングプレイも加えて感のよい守備をみせたGK前島などであった。一方、西軍は全体的にスピード不足で、特に、ゴール前でのプレイに鋭さを欠き、東軍の強い守りに攻撃が寸断され、単発的なシュートが東軍の速攻を誘った結果となった。

ゲームは、開始後3分7米スローを畑中がゲットし、東軍先取で進められた。その後東軍は7分、12分に点を加えて3対0と引き離した。これに対して西軍は13分味方のパスミスをフォローした竹内がループシュートでやっと1点を挽回し、ややゲームを盛り上げただけ。このゲームでの西軍は、終始東軍の強い積極的な守りに、全く得点することができなかった。西軍で惜まれたのは、0対1で進んだ7分、挽回のチャンスとなった7米スローを阻まれたことである。7米の失敗は東軍も6本を数えた大いに反省しなければならない。気力の差がはっきりした一戦であったように思う。

評　宇津野年一（全日本学連審判部長）

▽男子（西軍9勝、東軍14勝）

西軍 18（8−6、10−5）11 東軍

得	【西軍】		【東軍】	得
0	福井（中京）	GK	吉近（中央）	0
0	宍倉（大体大）	GK	柴田（法政）	0
2	中村（大体大）	FP	柳（法政）	2
2	福永（大体大）	FP	長谷川（法政）	0
2	中出（大体大）	FP	村田（法政）	2
7	穂積（大経大）	FP	山村（中央）	1
0	津川（大経大）	FP	脇若（早稲田）	2
1	牧野（同志社）	FP	菊池（早稲田）	0
3	夏目（中京）	FP	井手（法政）	2
0	大原（京都産大）	FP	川島（法政）	2
1	佐藤（名城）	FP	喜井（日体）	0
0	井上（九州産大）	FP	八日市屋（金沢工大）	0
0	大塚（九州産大）	FP	加藤（北海道大）	0
0	中馬（九州産大）	FP	高橋	0
0	成田（中京）	FP	橋本（法政）	0
18	（0）	7MT	（2）	11

（審・西川、奥村）

▽女子（東軍4勝、西軍1勝）

東軍 12（5−1、7−1）2 西軍

得	【東軍】		【西軍】	得
0	前島（東女体大）	GK	榎本（武庫川女）	0
0	松井（東京教大）	GK	平岡（山口）	0
4	畑中（東京教大）	FP	佐々木（中京）	0
0	西田（東女体大）	FP	山田（愛知教大）	1
3	坂本（日体）	FP	山本（大体大）	0
0	岩本（日体）	FP	田中（山口）	0
1	松本（日体）	FP	太田（甲子園）	0
1	木元（日体）	FP	奥野（大体大）	0
0	藤山（日体）	FP	高市（大体大）	0
0	橋（東女体大）	FP	竹内（甲子園）	1
3	赤岸（東女体大）	FP	寺尾（武庫川女）	0
0	高橋（東女体大）	FP	中川（武庫川女）	0
0	寺田（東女体大）	FP	鈴木（岐阜大）	0
0	小林（日体）	FP	橋本（武庫川女）	0
0	篠倉（東女体大）	FP		
12	（2）	7MT	（0）	2

（審・赤松、浅野）

小さな目　斉藤佳代子

学生の東西対抗、見に行きました。機関誌前号では13時30分からとあった開始時間、当日の新聞は14時。以前にも同じケースがあり新聞のほうが正しかったのですが、今回は機関誌が正確だったようで、私の行った時はもう開会式と、選手紹介(女)がすんだあとでした。時間の発表に気をつかって欲しいものです。プログラムの配布もいささかファン無視。招待者入口だけに置かれ、一般の人には、無料配布なのか、販売中なのか判らずじまい。

せっかくの場内放送も、ブツブツで、まちがえて、笑って…あまり感じがよくなかった。

一般ファンが増えつつあるハンドボール、もう少し入場券を買って楽しみに出かける人の立ち場に心くばりが必要ではありませんか？

（筆者は愛知県安城市在住）

世界女子 選手12名編成へ
男子アジア予選も同人数

日本協会は、今冬12月ユーゴで開かれる第5回世界女子選手権の代表選手団の編成について検討を進めていたが、このほど荒川理事長と井・全日本女子監督が話し合った結果、団長、監督、コーチ各1、選手12（GK2、FP10）とすることにまとまった。

これは、月例常務理事会(8月)の申し合わせ＝本誌既報＝にもとづいた数字である。

日本協会の財政事情、日本体協からの遠征補助の減額（注・今回は役員、選手合わせて10人分、往復航空費の三分の二、約三百万円）により、これ以上の規模の選手団派遣は難しく、増員すれば個人負担（注・現在は10〜15万円を限度にしている）を増額するか、一般会計内の選手強化費を削らなければならない。

井監督は、遠征中の健康管理などから、2チーム分〜14名〜の派遣を強く要望していたが、結局、日本協会側の意向をうけいれた。

荒川、井両氏の話しあいには全日本男子・北川監督も同席、選手12名案に合意しており、来春2月の第8回世界男子選手権アジア予選（本誌23頁参照）の代表も女子と同じ線にまとまることが確定的となった。

代表、国体で発表か

世界女子選手権への派遣人数が決定したことから、日本協会と井監督ら全日本女子コーチングスタッフは、代表選手選考の詰めに入り、9月末までに選手名簿の草案を準備、順調に人選が進めば田村会長、荒川理事長及び9月29日に予定される月例常務理事会で承認をうけたあと、千葉国体（10月14日〜18日、佐原市）期間中に発表となろう。

なお、世界選手権代表団は12月8日からの本大会（ユーゴ各地）の前オランダ、フランス、ユーゴでトライアルゲームを行なう予定にしており、11月20日頃日本を発つことになる。

日本、ルーマニア・ノルウェーと対戦 世界女子

渡辺和美IHF理事（日本協会副会長）からの連絡によるとIHFはこのほど第5回世界女子選手権の日程を次のように決定した。

▽予選リーグB組（12月8〜10日ザピドピッチ）8日日本×ルーマニア、9日日本×ノルウェー、10日ノルウェー×ルーマニア
▽準決勝リーグ（11日〜13日、ネゴティン）
▽決勝、順位決定ラウンド（14、15日ベオグラード）

確定的な女子五輪

日本協会は来日したユーゴのガシウオーダ（団長）、スノイ（監督）、ラインハウゼンのグラーベン（監督）の3氏から「ヨーロッパ各国は、モントリオールオリンピックは、男子12ケ国、女子6ケ国で行うことが確定したものとうけとっている」との談話を得た。

投書欄 明日への提言

広報、普及活動の積極化を

ユーゴ戦東京大会（9月1、2日）を見たのを機に、日ごろ思うことを……。

▽全国紙の後援をうけ、さらに対全日本2戦をNHK、民放（TBS）が放映した〝マスコミ進出〟は多いに結構。各全日本選手権も録画でよいからテレビに働きかけ見せて欲しい。

▽三景戦を盛りあげたのは立正高校ブラスバンドの鮮やかな演奏だった。国内のビッグカードの時もこうした〝演出〟を是非。

▽対外（市内）PRに一考を。今回は国電駅前の大看板が効果をあげた。駒沢における場合、正面入口より、サイクリングコース側などのほうが人目につき易い。また、好カード、全国大会の試合案内をマスコミへ積極的に流して欲しい。

▽だいたい男くさいスポーツではあるが、良いユニフォームにお目にかからない。派手なものは厭味だが、機関誌などでアドバイスしたらいいかが。小生は早大や大同製鋼のものが気にいっている。

▽普及のための提言。一、好試合のフィルム（8㎜）、ヴィデオテープ、スライドの作成とその一般貸出し。二、小学生、職場、主婦のための普及会実施。遊園地を利用したらどうか。三、主だった大会の時、出場選手の家族、関係機関（母校や職場など）に招待券を配布する。四、小中学生の無料招待の徹底―会場に来てみたら無料というのではなく、予め無料であることを広報する。

▽機関誌の購読申しこみが郵便振替えというのは不便。主要大会の時に出張販売や予約うけつけをしたらどうか。

【川崎市・一ファン】

韓国へ実業団ジュニア

第3回日韓男子社会人交流は、10月26日から11月4又は5日までソウル、光州などで6試合が行われる予定だが、全日本実連は、このほど、その参加チームとして、「全日本実業団ジュニア選抜」を派遣することになり、9月なかばの候補合宿（東京）後、13名の代表選手を次のよう決め、発表した。いずれも22才以下の若手。

なお、役員は団長・山田稔（全日本実連副理事長）、監督・竹野奉昭（同理事、ミュンヘン五輪コーチ）、コーチ・富永劭(同常務理事)、総務・横地宇吉、岡部正文（ともに全日本実連副理事長）の5氏。

【全日本実業団ジュニア選抜】

	氏名	（年齢．所属）	身長
GK	西牧 健二	(21. 三景)	175cm
	市川 孝	(20. 本田技研)	175
FP	辺見 伸人	(22. 日本鋼管)	180
	平野 稔	(20. 自衛隊下総)	180
	布施 雅夫	(19. セントラル自動車)	178
	吉田 義憲	(21. 日新製鋼)	176
	酒井 進	(22. 武田薬品光)	175
	柳川 実	(19. 大同製鋼)	175
	若本 修	(19. 神戸製鋼所)	174
	中水流秋則	(22. 自衛隊鹿屋)	172
	田中佑次郎	(20. 湧永薬品)	170
	岩本 広道	(19. 三菱レイヨン)	170
	坂口 健二	(19. 大崎電気)	168

日本，イスラエルと２戦（アジア地域）

～２月16・18日テルアビブで～

ＩＨＦ(国際ハンドボール連盟)は８月22日バーゼル（スイス）で来春２月28日から東ドイツで開く第８回男子世界選手権の大陸別予選（25ケ国参加）の日程について別掲のように正式発表した。

それによると、日本は、既報のとおり、イスラエルとアジア代表権をかけて対戦（２試合）することになり、両国協会の合意によってホームアンドアウエイ（互いの国で１試合ずつ）をさけ、テルアビブ（イスラエル）で、来春２月16日に第１戦、同18日に第２戦を行なうことになった。

世界男子大陸予選　カナダ欠場，五輪に影響？

このほか、ヨーロッパ地域では本誌106号既報後、スイス、ブルガリアの追加申しこみが認められて15ケ国となり、３ケ国ずつ五つのグループに分かれる。アメリカ、アフリカ地域も、それぞれ４ケ国がリーグ戦で争うが、アメリカ地域に出場が予定されていたカナダの名が消えているのは、モントリオール・オリンピック（昭51）の実施にどう影響するのか、一まつの不安を投げかけたといってよいだろう。予選の第１戦は、10月14日レイキャビクにおけるアイスランドーイタリア１回戦。

なお、日本ーイスラエル戦の審判員はシルリジアヌ、シデア組（ルーマニア）、ＩＨＦ代表人はエミール・ホルル（スイス）と決まっている。今回は韓国、台湾、クウエートなど他のアジア諸国はエントリーしていない。ユーゴらミュンヘン・オリンピックの上位８ケ国は予選を免除されている。

イスラエル　日程変更か　日本協会が得た非公式の情報によると、世界男子アジア予選の準備を進めているイスラエル協会は、その日程を第１戦２月14日、第２戦同17日に変更したいようすである

全日本男子、新編成へ

日本協会は、ユーゴ戦に出場した全日本を当初の予定どおり、９月９日京都での第２戦終了後〝解散〟させた。

来春の第８回世界男子選手権アジア予選候補選手を兼ねる「昭和48年度ナショナル」は、10月中に日本協会代表（＝未定）と、北川勇喜監督によって選ばれる予定。

人数については、日本協会・荒川理事長は「Ａチーム12、Ｂチーム12の計24名とし、ＡＢ間の入替えをひんぱんにし、Ｃともいうべきジュニアは今春３月以来のメンバーを修正したい」といっており、この線に落ちつくものと思われる。

また、コーチングスタッフについては、ユーゴ戦では選手決定から試合まで短期間のためトレーナー、マネジャーを含めて監督以下６人によって編成されたが、一部手直しが行なわれそうだ。

萬代秀三郎氏　（元日本協会理事前北海道協会理事長）、９月２日東京で心不全のため急逝された。66才。同氏は、北海道ハンドボール界育ての親で、同地域のレベルアップにも多大の功績を残され、特に昭和29年函館で開いた第９回国体ハンドボール競技や31年の日本ルーマニア函館大会の大成功は、氏の手腕に負うところが大きかった。

第８回世界男子選手権　各大陸別予選日程

◆アジア地域（参加２ケ国）
49年２月16日　①日本ーイスラエル（テルアビブ）
　　２月18日　②日本ーイスラエル（テルアビブ）

◆ヨーロッパ地域（参加15ケ国）
▽第１群（３ケ国）
48年10月14日～11月４日　アイスランド，フランス，イタリアの２回総当り（ホーム・アンド・アウエイ）
▽第２群（３ケ国）
48年11月４日～12月19日　ポーランド，スイス，オランダの２回総当り　（同）
▽第３群（３ケ国）
48年10月14日～12月15日　ノルウエー，ブルガリア，フィンランドの２回総当り　（同）
▽第４群（３ケ国）
48年11月11日～12月15日　デンマーク，ルクセンブルグ，ベルギーの２回総当り　（同）
▽第５群（３ケ国）
48年11月11日～12月16日　スペイン，オーストリア，ポルトガルの２回総当り　（同）

◆アメリカ地域（参加４ケ国）
48年11月４日～11日　アメリカ，アルゼンチン，メキシコ，ブラジルの２回総当り（ヴェノスアイレス）

◆アフリカ地域（参加４ケ国）
48年12月６日～９日　チュニジア，エジプト，アルジェリア，ギニアのリーグ戦（アルジェリア）

若潮国体近づく

第28回国体（若潮国体）ハンドボール競技は、10月15日から19日までの5日間、千葉県佐原市で開かれる。
今年は、3年ぶりで北海道がフルエントリー、5部門72チームが勢揃いして、トーナメントで優勝を争う。組み合わせをみながら有力チームを拾い出してみよう。
なお、大会第2日（10月16日）の午後、天皇陛下がご来臨になる予定。

（杉山　茂）

打倒・名城付めざす"選抜"

高校男子

インター・ハイ優勝の名城大付を単独で送りこんだ愛知に対して熊本ら選抜チームが、どこまでその力を示すか興味深い。
特に、順当なら準決勝で顔を合わす、奈良×東京の勝者との対戦は、事実上の決勝といえ、スケールの大きい試合が期待できる。
Bブロックはダークホースが並んだ。山口、宮城両単独への呼び声が高いが、香川も上り坂。ベストフォアを目指す千葉にとって、石川のまとまりはあなどれまい。

- 岐阜（名城大付）
- 北海道（函館有斗）
- 熊本
- 奈良
- 東京
- 石川
- 千葉
- 宮城（仙台育英）
- 香川
- 山口（下関中央工）

石川、山口めぐり激戦

高校女子

男子同よう、小松市女（石川）のインターハイにつづく"二冠"成るかが焦点。対抗は、夏の雪じょくを目指す徳山（山口）。インター・ハイ決勝では、タイムアップ寸前まで同点の熱戦、再び対決すれば予断は許すまい。
しかし、この両者もすんなり勝ちあがれるとは思えない。
徳山は、まったく息を抜けないブロックに入ったし、小松も大分戦はもつれる可能性じゅうぶん。
1回戦の涌谷（宮城）×愛媛は、愛媛の主力、新居浜商が、インターハイで抽せん負けのあとだけに、どうしても勝ちたいだろう。
ダークホースは、激戦の東海を勝ちぬいた岐阜と栃木。いずれにせよ、波乱ぶくみの展開となりそうだ。

- 石川（小松市女）
- 大分
- 北海道（室蘭商）
- 栃木
- 大阪
- 千葉
- 岐阜
- 宮城（涌谷）
- 愛媛
- 山口（徳山）

（注）都道府県名の下に特に表記のないものはいずれも県選抜。

首位固そうな大阪

教員

久々に近畿予選を無難に通った大阪（大阪イーグルス）が優勝最有力。早川、本田（GK）の両オリンピック代表を軸によほどのことがない限り、その首位は動くまい。
決勝の相手は地元・千葉か。オリンピック代表の氷海をはじめ浅原、岩下、松ら若さにあふれた布陣で、波にのれば、大阪も苦しみそう。その反面、意外にもろさを露す時がある。巧者を揃えた岩手や、静岡はそのあたりを突く策戦だろう。
福井、埼玉は、スピードのおとろえを巧さでカバー、いぜん上位の力を持っているが、大阪のカベは厚い。
熊本×香川は実力伯仲。

- 大阪（イーグルス）
- 熊本
- 香川
- 福井
- 埼玉
- 静岡
- 岡山
- 千葉
- 北海道（鶴陵ク）
- 岩手

熊本、東京の争いか
立ちはだかる茨城と東海勢

一般女子

実業団とクラブの力量差が、今年ははっきりしすぎている。勝敗的な興味は準々決勝以降の実業団同士のかみ合わせからということになる。
一応、優勝争いは熊本（大洋デパート）×東京（東京重機）とみたい。今シーズンに入ってからは大洋の2勝（NHK杯、全日本実業団）、しかも13―5、13―7と意外の大差だ。重機としては1勝を返したいところだが、エース牧野の負傷が長びきベストコンディションを望めぬとハンデになる。
両者の前に立ちはだかるのは茨城（日本ビクター）、三重（田村紡）、愛知（プラザー工業）。
いずれも、熊本、東京にヒケをとらぬ攻守を誇り、優勝をとげてもおかしくない顔ぶれだ。

- 熊本（大洋デパート）
- 福島（東北ムネカタ）
- 茨城（日本ビクター）
- 香川（三本松ＯＧ）
- 山口（徳山ＯＧ）
- 三重（田村紡）
- 千葉（全千葉）
- 福井（全福井）
- 北海道（室蘭ク）
- 兵庫（全甲子園）
- 愛知（プラザー工業）
- 東京（東京重機工業）

扇屋主力の千葉も力をつけてきており、あわよくば決勝進出を、と張り切っている。クラブ勢では、兵庫(全甲子園)がいちばん強そう。のんでかかると愛知も、足元をすくわれかねない。

(注)日本協会は、昨年、国体・一般女子の組み合せ(1・2回戦段階)を、単一企業チーム(実業団)と一般に分けて抽せんした。この方法に対して賛否両論があり、しかも、今年は、全千葉の編成を一般として認めがたいとの判断から、今シーズンの実績を基に熊本、東京をシード、その他の10チームは〝同格〟として処理された。

自信たっぷりの愛知
追う大阪、埼玉、三重ら

一般男子

シードされたのは愛知(大同製鋼)、三重(本田技研鈴鹿)、大阪(湧永薬品)、埼玉(大崎電気)。

波乱なく進めば、この4強が準決勝を争い、自信たっぷりの愛知が、去年大阪にゆずった王座を2年ぶりで取り返すことになるのではなかろうか。

愛知は、中井が本調子ではないが、藤中、花輪、松原のトリオは抜群、せりあいになると野田、加藤が光ったプレーを見せ、スキがない。GK柳川児も固い。

他の三者は実力伯仲、全日本実業団(7月・熊本)で力強いところを見せた三重に注目が集まるが、埼玉も盛り返してきており、この対戦は白熱しそうだ。

大阪は一本勝負に強く、愛知を降すとすれば、ここだろう。

トップクラスを追うのは広島(日新製鋼呉)、和歌山(丸善石油下津)、愛媛(住友化学菊本)、東京(三景)の実業団、鹿児島(海上自衛隊第一航空群)、茨城(自衛隊勝田)の自衛隊勢、神奈川(全神奈川)、千葉(全千葉)、富山(氷見ク)、青森(青森ク)、兵庫(スワローク)らのクラブ群。栃木(AOK栃木)、静岡(清商ク)、奈良(奈良ク)、山口(徳山ク)の有力クラブは1回戦ではげしく星をつぶしあう。

これらの中で、波乱をおこすとすれば三重を追う兵庫、東京、愛媛。なかでも東京は、実業団ベストフォアの位置を奪われた直後だけに燃えそうだ。

地元への普及に成果をあげる長崎(全佐世保)、熊本(本渡ク)らの登場は明かるい話題。

有力な愛知、千葉、大阪

得点争い

5部門に代表を送るのは北海道と千葉だけ。しかし、この両者よりも、男子で2部門優勝を狙える愛知が、一般女子で得点を積み重ねるとトップに躍りでてこよう。つづいて大阪。このほか、三重、熊本、東京、山口、埼玉、石川にもチャンスはある。地元千葉は、各部門とも手固く準々決勝へ進むことが必要、カギは高校男女ということになりそうだ。女子はかつてない混戦模様。

去年、天皇杯(総合)、皇后杯(女子)を飾った鹿児島も、今年は辛くも一般男子に代表を送っただけ、教員の予選敗退が大誤算。

愛知(大同製鋼)
神奈川(全神奈川)
京都(京都ク)
石川(金沢市役所)
山梨(全山梨)
広島(日新製鋼呉)
宮城(仙台ク)
鹿児島(海上自衛隊鹿屋)
北海道(函館有斗OB)
千葉(全千葉)
山形(東根球友会)
栃木(AOK栃木)
静岡(清商ク)
高知(高知ク)
大阪(湧永薬品)

埼玉(大崎電気)
長崎(全佐世保)
奈良(奈良ク)
山口(徳山ク)
和歌山(丸善石油下津)
富山(氷見ク)
茨城(自衛隊勝田)
岩手(盛岡商友会)
愛媛(住友化学菊本)
熊本(本渡ク)
東京(三景)
青森(青森ク)
兵庫(スワローク)
長野(葛尾ク)
三重(本田技研鈴鹿)

—国体地域予選— —代表決定記録—

(太字は代表)

◇北海道

▽一般男子
函館有斗OB 19—12 室蘭ク

▽同女子
室蘭ク 9—3 商門ク

▽高校男子
函館有斗 14—6 函館東

▽同女子
室蘭商 10—1 室蘭東

▽同教員
鶴陵ク 10—9 南・道教員

◇東北

▽一般男子第1・第2代表決定戦
青森(青森ク) 32—16 秋田(大曲ク)
宮城(仙台ク) 20—19 山形(東根球友会)

▽同第3・第4代表決定リーグ
岩手(盛岡商友会) 16—12 秋田
岩手 20—13 山形
山形 12—10 秋田
【順位】③岩手④山形⑤秋田(注・福島は失格)

▽同女子
福島(東北ムネカタ) 11—2 岩手(全岩手)

▽高校男子
宮城(仙台育英) 16—9 秋田(湯沢)

▽同女子
宮城(涌谷) 7—4 秋田(和洋女)

▽教員
岩手 19－16 福島

◇関東

▽一般男子第1～第3代表決定戦
東京（三昌）18－11 神奈川（全神奈川）
栃木（AOK栃木）22－17 茨城（自衛隊勝田）
埼玉（大崎電気）34－10 群馬（光電工業）

▽同第4、第5代表決定戦
山梨（全山梨）20－13 群馬
神奈川 18－11 茨城

▽同第6代表決定戦
茨城 26－14 群馬

▽同女子第1、第2代表決定戦
東京（東京重機）14－11 埼玉（大崎電気）
茨城（日本ビクター）29－0 群馬（前橋ピジョンズ）

▽高校男子
東京（選抜）18－17 群馬（全群馬）

▽同女子
栃木（選抜）7－5 茨城（選抜）

▽教員
埼玉 11－10 茨城

◇北信越

▽一般男子第1、第2代表決定戦
富山（氷見ク）23－20 福井（北陸電力）
石川（金沢市役所）16－14 長野（葛尾ク）

▽同第3代表決定リーグ
長野 21－11 新潟（柏崎ク）
長野 11－9 福井

▽同女子
福井（全福井）7－4 長野（仙禄ク）

▽高校男子
石川（選抜）13－8 長野（選抜）

▽同女子
石川（小松市女）9－3 福井（選抜）

▽教員
福井 26－15 長野

◇東海

▽一般男子第1、第2代表決定戦
愛知（大同製鋼）23－12 岐阜（二和家具）
三重（本田技研）17－8 静岡（清商ク）

▽同第3代表決定戦
静岡 10－8 岐阜

▽同女子第1、第2代表決定リーグ順位①三重（田村紡）②愛知（ブラザー工業）③静岡（城北ク）④岐阜（岐阜ク）＝試合記録は本誌31頁東海選手権女子の項参照。

▽高校男子
愛知（名城大付）16－12 岐阜（選抜）

▽同女子
岐阜（選抜）4－2 愛知（市邨学園）

▽教員
静岡 14－9 愛知

◇近畿

▽一般男子第1～第3代表決定戦
和歌山（丸善石油）20－11 京都（京都ク）
兵庫（スワロー・ク）31－28 奈良（奈良ク）
大阪（湧永薬品）40－11 滋賀（滋賀ク）

▽同第4、第5代表決定リーグ
奈良 18－17 京都
奈良 22－10 滋賀
京都 22－14 滋賀
【順位】④奈良⑤京都⑥滋賀

▽同女子
兵庫（全甲子園）12－7 大阪（大体大ク）

▽高校男子
奈良（選抜）14－7 大阪（選抜）

▽同女子
大阪（選抜）7－3 兵庫（選抜）

▽教員
大阪（イーグルス）20－10 和歌山

◇中国

▽一般男子第1、第2代表決定戦
広島（日新製鋼呉）37－13 岡山（川崎製鉄）
山口（徳山ク）24－10 鳥取（境港市役所）

▽同女子
山口（徳山OG）14－5 広島（広島選抜）

▽高校男子
山口（下関中央工）23－11 岡山（津山工）

▽同女子
山口（徳山）6－5 広島（選抜）

▽教員
岡山 14－10 山口

◇四国

▽一般男子代表決定リーグ
愛媛（住化菊本）26－7 高知（高知ク）
愛媛 30－7 香川（瀬戸ク）
高知 19－11 香川
【順位】①愛媛②高知③香川

▽同女子 香川（三本松OG）のみエントリーのため認定

▽高校男子代表決定リーグ
香川（選抜）12－10 愛媛（選抜）
香川 12－9 高知（選抜）
愛媛 23－8 高知
【順位】①香川②愛媛③高知

▽同女子代表決定リーグ
愛媛（選抜）8－6 香川（選抜）
愛媛 22－5 高知（選抜）
香川 18－1 高知
【順位】①愛媛②香川③高知

▽教員
香川 28－19 愛媛

◇九州

▽一般男子第1、第2代表決定戦
鹿児島（海自第一航空群）29－23 長崎（全佐世保）
熊本（本渡ク）15－13 大分（昭和電工）

▽同第3代表決定戦
長崎 30－20 大分

▽同女子
熊本（大洋デパート）26－3 沖縄（沖縄ク）

▽高校男子
熊本（選抜）20－12 福岡（選抜）

▽同女子
大分（選抜）6－4 熊本（選抜）

▽教員
熊本 28－14 福岡

全国私立中高校保健体育科研修会指導

報告　山田　哲雄

「人間性を基礎とした新しい保健体育のありかた」を今年度の目標として、8月27日から3日間、東京・国立競技場、十文字学園で行われた第11回全国私立中学・高校保健体育科研修会は、例年どおり講演と実技研修に分かれ、実技研修の球技はハンドボール、サッカー、バスケットボール、バレーボールの種目が実施された。

ハンドボールは、日本協会普及指導部中央委員・高田日呂美、山田哲雄の2名が出向、「改正ルール(解説)と基本技能の初心者指導法」のテーマにより進められた。

ハンドボールが中学、高校の指導要領に採り入れられるようになり、現場での正課体育授業に1校でも、1時間でも多く、また、より正しく、高度に実施されることが重要かつ急務であると考えるが今回は、講習時間正味2時間、むしあつい体育館（コート1面）に全国82校99名の先生方が詰めかけての研修とあって、内容の選択に苦しみ、超スピードでの授業にならざるをえなかった。しかし、各校に帰られたあと、大いにハンドボールを実施していただきたいと力説した我々の考えは理解を得たと思う。

このような現役の体育教師を対象にしたハンドボールの指導者講習会を、せめて2〜3日の日程で行なえれば、中味の濃い内容に終始できるのだが、と残念に思えた。

今回から、参加者に、財団法人私学研修福祉会から交通費の半額と日当など千八百円（日額）の半額が支給されるようになったが、これを基準にした予算編成でもよい。日本協会普及施策に指導者講習会のプランをぜひ組みこみたいものである。

なお、研修会の3日後、参加者の中から希望者による日本×ユーゴ戦（9月1日、東京体育館）観戦を行なった。

○……研修実施内容……○

▽ハンドボール概説（5分間）▽準備運動とボール利用のモチベーションエクササイズ（同）▽キャッチングの基本（10分間）▽スタンディングパス各種の説明と短い練習（5分間）▽GK防禦法の実際と危険防止についての実技説明（10分間）▽パスカット、シュートカット(同)▽シュート練習(15分間)▽ドリブルの効果とフェイント三種（10分間）▽クロス、リターンパスを利用して瞬間的に2対1をつくる(同)▽コート4分の1面を使用して3対2の練習(同)▽改正点を中心にルール解説(同)▽試合形式でルール、審判法、試合要領の学習（20分間)。

第2回 全国中学生大会に参加して

～参加選手寄稿特集～

第2回全国中学生大会は、本誌前号既報のとおり、8月16日から18日までの3日間、名古屋市近郊・愛知県青少年公園緑地球技場に全国から男女各10チームが参加して行なわれ、男子は笹島（愛知・名古屋）、女子は福泉南（大阪・堺）が優勝して幕を閉じた。

参加した選手たちは、母校や、郷里に戻りこの大会をどのようにふり返っているだろうか。

本誌では、日本協会普及指導部の協力を得て選手からの卒直な感想を特集してみた。（到着順）

麻生一中（茨城）　横山武美

全国中学ハンドボール大会、これに出場し、できることなら優勝を狙う、これが僕の夢であり、目標でもあった。

しかし、その夢も、ついに果たすことはできなかった。でも全国大会に出場できた。

このことは、一生の思い出として残ると思う。チームのみんなも茨城県では、自分達だけが県外の遠征試合を経験でき、県外のチームと試合ができた。それだけで満足だと自分は思う。今まで負けるということをしらない、そんなチームばかりが集まった全国大会。優勝した笹島中学以外の何百というチームは、僕達と同じように敗れる屈辱を味わったと思う。

しかし、まだ自分達には、高校大学と上がある。そのときこそ自分のもてる力を全部だしきり、自分の夢を実現したいと思う。これからハンドボールができないとしても、自分は、他のどのスポーツよりも、もっともすぐれたスポーツ、ハンドボールをしり、それを経験できた、そんな自分は、しあわせだと思う。

大野中（長崎）主将　山田幹子

やはり全国大会の決勝戦ともなると、私達の試合とはちがうと、つくづく思いました。

でも、とても勉強になりました。それを下級生によくつたえ、また出場してもらい、りっぱな成績を残してもらいたいと思っています。

それから設備のことで書きます。

これは全国大会に出場した人はどなたでも気づいたことと思いますが、まず、コートがものすごくつかいにくかったことです。

しばふと聞いていましたが、サッカーで荒れて、土がみえているところが何か所もありドリブルがしにくく、走りにくく、すべりやすかった。それに、宿泊棟から会場にいくまでに時間がかかった。

次は宿泊棟のことです。まず部屋は人数に対してせまかったと思います。食事をとるのも時間がかかり、食堂もせまく感じました。私達はきめられた生活をするために、きたのじゃないのだから、宿泊は、自由にしてもらいたかった。あそこにいると、きゅうくつでたまらなかった。これが、私達大野ハンドボール部のみんなの意見です。最後に、名古屋は、私達にとって少し遠かったです。

笹島中（名古屋）　大釈慎一

この大会に出場するということが、僕らの大きな目標だった。だが、出たからには勝たなければ……、参加することに意義があるなどとよく言われる。しかし、僕はこのことばがあまり好きではない。なぜなら、僕はこのことばが勝つ自信のない者のことばか、それとも、負けた者の負け惜しみに聞こえるからだ。確かに、参加することに意義はある。が、勝つために参加し、全力を尽くすことの方が意義があると思うのだが……。

僕がハンドボールクラブにはいったわけ、それは別にハンドボールが好きだったからではない。とにかくそのころは、ハンドボールなど名前すら時々聞くだけで、競技の仕方などは全く知らなかったのだから。はいったわけというのは、学校にあまりめぼしいクラブがなかったことと、僕らの学校のハンドボールクラブは、かなりの線までいっていたということからだ。

一年生の時から四・五人やめていった。練習は猛練習などということは絶対ない。むしろ他の学校に比べると少々練習が足りないような気もした。といっても、練習だけがやめる原因ではないようだ。ハンドボールは、僕らの学校では中心となっているが、人気の点ではまだまだ。このこともかなり災いしているのではないか。

練習はきびしくなかったが、ここまでこれたのは、指導してくれた先生の力が大きいと思う。大会が終わってふりかえってみると、僕ら全員、先生にいろいろお世話

になった。まったく先生もえらいものだと思う。

僕らの中で、高校でもハンドボールをやると言っている者は半分ぐらいしかない。僕もどうするかまよっている。だが、ハンドボールに人気が集まるためには、やはり強くなければいけないのではないか。オリンピックなどの大きな大会で上位進出すればかなり人気は高まると思う。僕らはまだまだこれからだ。がんばってゆきたい。

戸町中（長崎）主将　宮本英治

▽よかった点

一、環境がよくて、のびのびとプレーができた。

二、大会の設備、運営がよく整っていた。

三、生活規則が徹底していて、コンディション作りや精神の修養に役だった。

▽来年度大会へのアドバイス

一、審判員のジャッジの徹底。

二、練習時間をふやしてほしい。

三、技術指導だけでなく実際に模範試合をみせてほしい。

岩国中（山口）主将　奥本和子

全国大会初出場の私達は、全国のハンドボールレベルがどの程度のものであるかまるっきり見当もつきませんでした。

中国大会の時は、割合に楽に優勝できましたし、県内にもハンドボールをやっている学校が少ないので、全国広しといえども余り変わりないのではないか、くらいに考えていた次第です。

ところが全国大会に出場してみてはっきりわかりました。上には上がいるって。

優勝した福泉南などの試合を見ていますと彼女達の技術の高度なのに感心してしまいました。さほど背が高いわけでもなければ幅があるわけでもないのに、小まわりをきかせてたくみに攻め込んでいくんです。

何点か先取されたが、すごく落ち着いていたし、全く彼女達には感心させられどうしでした。

私達は、また初歩からやり直さなければという気持ちで一ぱいになりました。

宿泊棟での規律ある生活は、きびしいながらも楽しい思い出となりました。窓から眺める景色がとてもきれいでした。

ただ一つ、私達にとってやりにくかったことは、コートが一面しばふだったということです。今までしばふのコートで練習したことがないので本当に閉口してしまいました。ドリブルはやりにくいし走りにくいし、いつもの三分の二の力も出なかったでしょう。私達のチームは比較的ドリブルが多いのでそれができなかったことが負けた一つの大きい原因と思っています。

全国各地からいろんな人々が一つの目的を持って集まり、一諸に宿泊し、一諸に食事をする、こんな機会に巡り会えたことをとても誇りに思っています。いろんな地方のいろんな人々、そしていろんなことば……とっても楽しいですね。

また一歩から出直しです。後輩に希望をたくして、今度こそベストフォアに残れるぐらいに頑張って欲しいものです。全国大会に出場したことは私にとってすばらしい思い出として、いつまでも心に残ることでしょう。

小松南部中（石川）　永野寿子

毎日の練習のためか、今年は全国大会に出場することができた。出場するからには、せいいっぱいがんばってこようと思って、名古屋へ出かけた。

愛知県青少年公園は、広く美しくて、私たちをびっくりさせた。それにしても競技場のサッカー場は、ハンドボールにはちょっとむいていないように思われた。芝布のため、ドリブルはあまりボールがはずまないし、すべって、ほんとうの力を出せないと思う。

宿舎は規則がきびしいので、まごつくこともあったが、楽しくすごすことができた。

試合は一回戦は勝ったが、二回戦で負けてしまったので残念だった。これでもうハンドボールをすることもないと思うと悲しかった。全国大会出場までの練習、そして名古屋での試合、どれをとってみても、私達のよい思い出としてのこっている。

無記名

全国の中学ハンドボールってどのくらい強いのだろう、僕たち恥ずかしくないか、名古屋はどんな都会かな。

いろんな期待といろんな不安でいっぱいでした。

やってみると、皆んなやっぱりすごい。プレーは、僕らが知っているものばかりだったのだから、きっと練習時間がちがうのだと反省した。

ハンドボールってどんなスポーツだ、という人が多い。

でも、全国でこんなにたくさんしかも強い仲間がいたので安心した。ハンドボールをやってることが、「変わっている」と思われたりしてないか、という心配が、やはり間違っていたことを知った。これからは大いばりだ。

（嬉しい原稿でした。氏名大至急知らせて下さい。　編集部）

男女とも奈良勢勝つ

近畿中学福泉南（大阪）敗れる

中学大会記録

ブロックの中学大会としてもっとも長い歴史をもつ第22回近畿中学校総合体育大会ハンドボール競技は、8月24、25日の両日奈良市立中央体育館などに近畿6県から男女各12校が参加して予選リーグのあと決勝トーナメントで優勝争いが行なわれた。

男子は、奈良－大阪勢の激突から都南、生駒が勝ちあがって奈良同士で決勝、都南が前半のリードを守り切った。

女子は、決勝トーナメント1回戦で、全国中学生大会（8月・名古屋＝既報）2連勝の福泉南（大阪）が刈藻（兵庫）のはげしい追いこみにあって敗れる波乱があった。決勝は生駒（奈良）－刈藻の対戦から生駒が押し勝った。

▽男子予選リーグA組
飛　松（兵）16-5　洛　星（京）
福　泉（大）19-2　洛　星
福　泉　11-6　飛　松

▽同B組
都　南（奈）13-10　打　田（和）
都　南　13-10　浅　井（滋）
打　田　10-7　浅　井

▽同C組
大　淀（大）7-3　守　山（滋）
大　淀　12-6　鳥屋城（和）
鳥屋城　8-5　守　山

▽同D組
下　鴨（京）12-9　浜の宮（兵）
生　駒（奈）15-9　浜の宮
生　駒　13-7　下　鴨

▽同決勝トーナメント1回戦
都　南　10（4-4、6-4）8　福　泉
生　駒　9（1-5、8-2）7　大　淀

▽同決勝
都　南　9（4-2、5-5）7　生　駒

▽女子予選リーグA組
刈　藻（兵）15-7　斑　鳩（奈）
岩　出（和）11-3　斑　鳩
刈　藻　10-5　岩　出

▽同B組
福泉南（大）20-3　秦　荘（滋）
皆　山（京）11-10　秦　荘
福泉南　18-2　皆　山

▽同C組
生　駒（奈）13-6　神　出（兵）
神　出（兵）10-5　多　賀（滋）
生　駒　8-2　多　賀

▽同D組
高　雄（京）9-3　鳥屋城（和）
住　吉（大）8-6　鳥屋城
住　吉　7-4　高　雄

▽同決勝トーナメント1回戦
刈　藻　6（2-5、4-0）5　福泉南
生　駒　11（6-2、5-1）3　住　吉

▽同決勝
生　駒　6（4-1、2-3）4　刈　藻

◇大阪　48年度夏季大会（8月・大阪市中央体育館ほか）。参加＝男36、女29

▽男子準々決勝
住　吉　14-6　新北野
福　泉　21-8　豊中二
大　淀　11-8　豊中四
東　陽　10-5　福泉南

▽同準々決戦
福　泉　16-13　住　吉
大　淀　8-6　東　陽

▽同3位決定戦
東　陽　14-7　住　吉

▽同決勝
福　泉　11（延）10　大　淀

▽女子準々決勝
住　吉　7-5　大　淀
新北野　7-2　久米田
豊中二　16-1　貝塚一
福泉南　13-2　箕面二

▽同準決勝
住　吉　8-1　新北野
福泉南　9-6　豊中二

▽同3位決定戦
豊中二　9-1　新北野

▽同決勝
福泉南　7-1　住　吉

◇埼玉　県民体育大会中学の部（8月・浦和）参加＝男11、女6

▽男子準々決勝
八　潮　33-2　深　谷
蓮　田　17-4　狭山東
白岡篠津　19-12　松　伏
川口十二月田　17-11　東松山松山

▽同準決勝
八　潮　22-4　蓮　田
川口十二月田　8-7　白岡篠津

▽同決勝
八　潮　10-8　川口十二月田

▽女子1回戦（2試合）
深　谷　10-9　狭山東
松　伏　15-2　所沢向陽

▽同準決勝
深　谷　12-0　川口十二月田
松　伏　18-4　川口芝

▽同決勝
松　伏　10-3　深　谷

◇愛知　第27回愛知県中学校総合体育大会（8月・一宮）参加＝男12、女12

▽男子決勝トーナメント1回戦
笹　島　19-13　豊橋南部
桜　田　17-10　上　野

▽同決勝
笹　島　16-12　桜　田

笹島中は3度目の優勝

▽女子決勝トーナメント1回戦
上　野　13-5　桜　田
牟　呂　9-7　形　原

▽同決勝
上　野　17-10　牟　呂

上野中は2連勝6度目の優勝

◇豊中市（大阪）豊中市立中学校総合体育大会（8月・豊中市民体育館）参加＝男6、女5

▽男子準決勝
豊中二　16-6　豊中九
豊中四　21-5　豊中五

▽同3位決定戦
豊中九　17-6　豊中五

▽同決勝
豊中四　8-7　豊中二

▽女子準決勝
豊中二　9-4　豊中三
豊中五　16-6　豊中九

▽同3位決定戦
豊中三　29-7　豊中九

▽同決勝
豊中二　17-2　豊中五

◇名古屋市　市大会（7月）、参加男20、女15

▽男子準決勝
桜　田　19-9　明　豊
笹　島　15-6　東　港

▽同3位決定戦
明　豊　14-11　東　港

▽同決勝
笹　島　13-6　桜　田

▽女子準決勝
笹　島　16-2　猪　高
桜　田　10-3　菊　井

▽同3位決定戦
猪　高　7-3　菊　井

▽同決勝
笹　島　9-6　桜　田

田村紡、ブラザーに快勝

各地の記録

第25回東海選手権は8月25、26の両日静岡・清水市商グランドに東海4県の予選勝者が集まり開かれた。

男子トーナメントは、予想どおり、3年連続して大同製鋼（愛知）―本田技研（三重）の対決となり東海実業団（5月、名古屋）で大激戦を演じているだけに熱戦が期待されたが大同のスピード豊かな攻撃に本田は押しまくられ、大差がついた。

大同は2連勝、愛知代表の優勝は2年連続20度目。

女子はリーグ戦で行なわれ、田村紡（三重）が、昨年ブラザー工業（愛知）に奪われた覇権をとりもどした。田村紡の優勝は2年ぶり8度目、三重代表の優勝も同じ。

▽男子準決勝（＝1回戦）

大同製鋼（愛知）23（14－7、9－5）12 二和家具（岐阜）

本田技研（三重）17（9－4、8－4）8 清商ク（静岡）

▽同3位決定戦

清商ク 10（5－4、5－4）8 二和家具

▽同決勝

大同製鋼 21（11－3、10－6）9 本田技研

▽女子リーグ

田村紡（三重）10（5－2、5－3）5 城北ク（静岡）

ブラザー工業（愛知）18（6－1、12－0）1 岐阜ク（岐阜）

田村紡 25（13－2、12－3）5 岐阜ク

ブラザー工業 12（6－1、6－1）2 城北ク

城北ク 9（3－2、6－4）6 岐阜ク

田村紡 13（6－3、7－5）8 ブラザー工業

【順位】①田村紡②ブラザー工業③静岡城北ク④岐阜ク

男女とも3連勝の強味

第3回北海道クラブ選手権は8月25、26の両日函館東球技場に男子4、女子2チームが参加して行なわれ、男子は函館有斗OB、女子は室蘭クが、それぞれ攻守に一日の長を示し3連勝をマークした。

▽男子準決勝（＝1回戦）

函館有斗OB 38（16－6、22－5）11 函工OB

室蘭ク 34（13－3、21－9）12 亀田市役所ク

▽同決勝

函館有斗OB 19（6－7、13－5）12 室蘭ク

▽女子決勝

室蘭ク 9（4－1、5－2）3 商門ク

仙台ク、14年ぶりの優勝
女子は東北ムネカタ勝つ

第26回東北選手権は8月31日、9月1日の両日仙台・宮城県スポーツセンターに東北6県の男女各代表が集まって行なわれた。

男子は第1ラウンドの勝者3チームによって決勝リーグが争われる予定だったが、盛岡商友会（岩手）を14―11で破って勝ち進んだSGク（福島）に、登録違反選手がいたため没収試合。結局、仙台ク（宮城）―青森クの決勝から仙台クが逆転勝ち、青森クの連勝を阻んで14年ぶり6度目の優勝を遂げた。宮城代表の優勝は3年ぶり17度目のこと。

女子は4チームの出場から実業団の東北ムネカタ（福島）が快勝2年連続して栄冠を握った。福島代表の優勝は2年連続4度目。

▽男子第1ラウンド（決勝リーグ進出チーム決定戦）

青森ク（青森）32―16 大曲HC（秋田）

盛岡商友会（岩手）没収試合 SGク（福島）

ただし、盛岡商友会は決勝リーグには出場しない。

仙台ク（宮城）20―19 東根球友会（山形）

▽同決勝

仙台ク 15（6－7、9－5）12 青森ク

▽女子準決勝（＝1回戦）

全岩手 9（6－1、3－5）6 全和洋（秋田）

東北ムネカタ（福島）17（8－1、9－5）6 けやきク（宮城）

▽同決勝

東北ムネカタ 11（5－1、6－1）2 全岩手

関東は雨で流会

第20回関東選手権は8月24日から26日まで、山梨県塩山市で行なわれる予定だったが、雨にたたられ、併行していた国体関東予選を優先して実施することになり、流会となった。

関東選手権が流れたのは、昭和29年復活後初めてであるばかりか戦前（昭12～昭18）、戦後の第一次復活（昭24、25）を通じても例がない。

トヨタ車体、順当の4連勝

▼第4回刈谷（愛知）リーグ（9月・愛知教大ほか）

▽男子5位決定戦

豊田工機 24―5 豊田自動織機

▽同決勝リーグ

トヨタ車体 42―5 アイシン精機

刈谷ク 18―12 日本電装

トヨタ車体 25―6 日本電装

刈谷ク 15―11 アイシン精機

日本電装 23―10 アイシン精機

トヨタ車体 25―7 刈谷ク

【順位】①トヨタ車体＝4連勝②刈谷ク③日本電装④アイシン精機

▽女子決勝リーグ

豊田工機 7―4 刈北OG

愛知教大 10—3 刈北OG
愛知教大 9—5 豊田工機
【順位】①愛知教大＝2年ぶり2度目の優勝②豊田工機③刈谷北高OG

一般で川崎製鉄が進出

▼第28回岡山県体育大会ハンドボール競技（8月・真備高）
▽一般男子1回戦（1試合）
落合ク 棄権 天城OB
▽同準決勝
倉商OB 14—12 落合ク
川崎製鉄 25—16 児島柏会
▽同決勝
川崎製鉄 23（9—6, 14—7）13 倉商OB
▽高校男子準々決勝
津山工 19—13 児島
金川 20—1 津山工専
倉敷工 18—8 倉敷商
天城 13—11 岡山工
▽同準決勝
津山工 20—8 金川
倉敷工 18—7 天城
▽同決勝
津山工 18（8—5, 10—1）6 倉敷工
▽女子1回戦（2試合）
井原 16—4 操山
岡山女 18—9 金川
▽同準決勝
真備 23—4 井原
津山商 11—5 岡山女
▽同決勝
真備 12（4—2, 8—5）7 津山商

高校女子は岩手女快勝

▼第25回岩手県民体育大会ハンドボール競技（8月・岩手大）
▽一般男子準決勝（＝1回戦）
岩手教員ク 22—10 岩手大
盛岡商友会 22—5 白亜ク
▽同決勝
盛岡商友会 19（10—8, 9—7）15 岩手教員ク
▽高校男子準々決勝
花巻北 10—9 生活学園
盛岡四 13—9 花巻農
盛岡商 25—5 岩手
盛岡一 11—3 久慈(長内)
▽同準決勝
花巻北 9—8 盛岡四
盛岡商 11—6 盛岡一
▽同決勝
盛岡商 11（3—5, 8—2）7 花巻北
▽同女子準々決勝
花巻南 12—2 黒沢尻南
花巻北 7—6 大原商
岩手女 4—2 盛岡二
花巻農 7—4 一関修紅
▽同準決勝
花巻南 13—1 花巻農
岩手女 7—4 花巻北
▽同決勝
岩手女 13（6—0, 7—0）0 花巻南

国体県予選②（報告分のみ）

◇愛媛 ▽一般男子決勝リーグ
住化菊本 27—7 丸善石油松山
丸善石油松山 18—7 新居浜ク
住化菊本 棄権 新居浜ク
▽高校男子準々決勝
松山北 20—6 今治南
宇和島南 13—10 新居浜東
松山工 8—6 新居浜工
松山東 16—8 新田
▽同準決勝
松山北 33—9 宇和島南
松山工 18—10 松山東
▽同決勝
松山北 17—11 松山工
▽同女子1回戦（3試合）
新居浜東 12—6 今治南
土居 12—4 今治明徳
松山商 15—2 新居浜西
▽同準決勝
新居浜商 24—0 新居浜東
松山商 10—5 土居
▽同決勝
新居浜商 14—6 松山商
◇広島 ▽一般男子準決勝
日新製鋼呉 28—9 呉商ク
三菱レ大竹 不戦勝 修道ク
▽同決勝
日新製鋼呉 16—9 三菱レ大竹
◇奈良 ▽高校男子準々決勝
生駒 18—5 育英
一条 20—9 桜井商
添上 25—0 畝傍
奈良 17—5 郡山
▽同準決勝
添上 18—10 奈良
生駒 16—5 一条
▽同決勝
生駒 17—11 添上
▽同女子1回戦（3試合）
生駒 9—5 十津川
一条 10—7 桜井商
郡山 11—4 榛原
▽同準決勝
添上 17—4 生駒
一条 9—3 郡山
▽同決勝
添上 14—10 一条
◇宮城 ▽高校男子準決勝
古川工 13—12 仙台三
仙台育英 24—12 塩釜
▽同決勝
仙台育英 22—9 古川工
▽同女子準決勝
宮二女 9—0 古川商
涌谷 12—2 古川女
▽同決勝
涌谷 10—6 宮二女
（注）国体県予選記録の掲載は今回で完了。

【お詫び】 本誌112号18頁・全国中学生大会女子準決勝第1試合のスコアが間違っておりましたので再録いたします。
福泉南（大阪） 6（1—5, 5—0）5 加納（岐阜）

★編集後記

○……川崎市の一ファンのかたから、たまにはグラフ特集（増刊）などを出したら、という御意見をいただきました。
同種の御提案、ほかにもあり、目下研究中です。いつもながら、「スタッフと予算が…」と言い訳けが消極的なことをお許し下さい。
○……ユーゴ、驚くほど強く厳しく、ラインハウゼン、びっくりするほどのんびりしていました。スポーツに対する考えかたの両極端、読者の皆さんの声を期待しています。
日本のハンドボール界は、実はその両方をそれぞれの立ち場から強く求められているのです。
○……あたりまえの話なのですが、本誌が毎号キチンと、それもフレッシュなニュースを満載させて発行されることに、他の競技団体関係者や、報道関係者が注目しはじめてくれています。藤木前編集長の残してくれたこの伝統、皆さんの力で、受けついでいきたいものです。
○……7月で〆切った編集委員の公募、まだ続けています
投稿、寄稿、試合結果……パリバリ送って下さい。（杉）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一一三号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十八年九月二十五日印刷 昭和四十八年十月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東[illegible]渋谷区神南一ー一ー一
電[illegible] 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百円（年間購読料千八百円）